モンスターマスク

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターマスク

【Ｎコード】
Ｎ５０６８Ｋ

【作者名】
岳石祭人

【あらすじ】
ＣＭ撮影中のスタジオで死亡事故が発生。しかし、事故か？、事件か？　人を殺してしまった俳優は、特殊メイキャップでゲームのモンスター「ウルフマン」になっていた。関連すると思われる凶悪事件が連続し、背後に怪しい人物が浮上する。怪しい、催眠術師＝マスター・パピー。絶対不可能という催眠術による殺人を、彼は行ったのか？　ラスト、驚愕の展開が待ち受ける。

01　アクシデント

さあ、始まりますよ。
＞ｉ５６１１―１０７＜

「ヨーイ、スタート！」
この声が君がモンスターに変身する合図だ。
君の体に力がみなぎり、君は無敵のモンスターになるのだ。
さあ、ぶちかませ！　君のその力をみんなに見せてやれ！
君が最強、君が王様、君が荒ぶる暴君だ！
誰にも何も言わせるな、君の抱えている悩みごと、支配しろ！
証明してみせろ、君の力を！
さあ、
ぶちかませ！

東京渋谷のレンタルスタジオであるＣＭの撮影が行われていた。
コンピューターゲームのＣＭである。
アクションシーンの撮影で、ブルーバックに同じくブルー（実際は緑色）のビルの壁が立てられている。
ワイヤーアクションを使用するため、通常より更に多く、３０人近いスタッフが念入りに撮影前の準備とチェックを行っていた。
紺色の重装備をした機動警官に扮した俳優が４人、ＡＤと立ち位置と演技の確認を行っていた。
そこへ主役の俳優が入ってきた。
彼が入ってくると、おおー、と低い歓声が上がり、所々笑みが見受けられた。
肉体派の背の高い俳優は礼儀正しく
「よろしくお願いします」

とピタッと両手を脇に揃え腰を折って挨拶した。監督が
「よろしく頼みます」
と頼もしそうに、満足そうに頷き、スタッフたちもそれぞれ「よろしくお願いします」と声を出して挨拶した。
腰を元に戻した俳優は、

モンスターだった。

特殊メイキャップである。
黒のライダージャケットの前を開け、その下のTシャツは縦にびりびりに破け、筋肉隆々と胸が盛り上がっている。ジャケットの腕もパンパンに張っている。
顔は、獣だ。
仁王のような怒りの表情を２００％デフォルメして盛り上がった筋肉で表している。
鼻が太く大きくなって、ライオンのようだ。鼻に釣られて上顎も盛り上がっている。下あごもがっちり張っている。髪の毛は黒く太い毛がうねりながらツンツン立っている。
人と獣の中間の顔を、見事な特殊メイクがリアルに再現している。
獣は、狼だ。
彼はゲームの主役キャラ、ウルフマン、に、半分変身した姿を今しているのだ。
主演俳優は監督から絵コンテを見せられながら撮影の段取りを説明された。

夜の街を徘徊するモンスターを武装警官が捕獲しようと迫ってくる。彼は逃げるが、追いつめられ、ついに一人の警官が警棒を振るって襲ってくる。その腕を掴んだウルフマンは・・・

このシーンで主役と共に重要なのがウルフマンに襲いかかり、腕

を捕まえ、腰を捕まえ、大きく投げ飛ばされ、ビルの壁に激突する警官役の俳優だ。
彼は腰にワイヤーアクションのワイヤーを装着され、監督に紹介されると元気に「よろしくお願いします！」と主演俳優に挨拶した。
「よろしくお願いします」
と主演俳優も恐ろしい顔で礼儀正しく挨拶した。

投げ飛ばすシーンのリハーサルが行われた。
ワイヤーアクションは俳優の演技とワイヤーを引っぱる裏方の連携が大切で、タイミングを合わせるのが難しい。投げ飛ばされる俳優はもう１０数回吊り上げられて練習を繰り返していたし、リハーサルに望んだ主演俳優も、さすが肉体派で多数のアクションをこなしているだけに、一発でオーケーが出た。
「オーケー！　それじゃ本番行くよー」
「本番行きまあーーす！」
助監督の声に現場が一気に緊張し、集中した。
軽くメイキャップの修正をしたメイクさんが離れ、俳優たちはそれぞれのポジションに付き、身構えた。
カチンコをカメラ前に構えたＡＤが言う。
「シーン２　カット３から５」
鋭い目でじっと俳優たちを見て、監督が声を上げる。
「よおい、　　スタート！」
カチッとカチンコが切られ、本番の撮影が始まった。

ダッと横からウルフマンが走ってきて、立ち止まり、振り返る。
ダダダダダッ、と武装警官たちが追って駆け込んでくる。彼らは腕を守る小型のシールドと長い警棒を構え、ウルフマンを包囲しようとする。
囲まれ、逃げ道をふさがれていくウルフマンは焦りと怒りで彼らの動きを追って大きく右へ左へ顔と体を振る。

ジリジリと迫る警官たち。
きょろきょろしていたウルフマンが正面を向き、両手を握りしめて、
「うおおおおおおおおおっ」
吠える。
「ウオオオオオオオオオオオッ」
その咆哮に一瞬ビクッとした警官たち、一人が横からウルフマンの隙をついて警棒を振りかぶって襲いかかる。
ガシッとその腕を握ったウルフマンは、
「うおおおおおおおおーーっっ」
腹の底から恐ろしい声を上げ、ギリッと腕を絞り上げると、
「うおおっ！」
吠えて、警官をブンと上に力任せに振り上げると、
「うわっ、」
頭上まで腰と足の浮き上がった警官を、
力任せに床に叩きつけた。
「ウオッ、ウオッ、ウオオオオオオオッ、
ウオオオオオオオ、ウオオオオオオオオオッ、
オオオオオオオオオオッッ！！」
ウルフマンは両手を握りしめて激しく体を震わせて、犬歯のにょ

っきり伸びた口を大きく開けて大きく咆哮した。

「……カット……」

監督が小さく言うと、助監督が咆哮をやめて突っ立つ主演俳優の横に倒れた俳優の下へ駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

俳優はうつ伏せのまま返事をしない。

「おい、おい？　大丈夫か？　おい、おい」

肩を叩き、顔を覗き込んだ助監督は、

「……おい……、……おい……」

呆然と立ち上がった。

「彼……、返事をしません……」

「ば、バッカヤロウ！」

監督が怒鳴った。

「救急車呼べ！　えーと、それと、ＡＥＤだ！　おい、使える奴は？　は、早くしろ！　まだ間に合うかもしれんだろう？！」

監督に叱られて皆わあっと動き出したが、呆然と立つ助監督は思った、

無理だろう、多分…、

首が折れている。

と……。

02　調査

警官役の俳優は、結局息を吹き返すことはなかった。
頭から思い切り固い床に叩きつけられ、やはり首の骨が折れていた。即死だっただろう。
彼を叩きつけた主演俳優は駆けつけた警官に緊急逮捕された。
主演俳優は自分がいったい何をしてしまったのか、ただただ呆然とし、事実のショックに、まるきり悪夢の中にいるように目をうつろに、ふらふらしていた。
写真を撮られた後、主演俳優は警官立ち会いの下、専門の特殊メイクアップアーティストにモンスターのメイクを外されていった。装着に4時間かかっているが、外すのにも1時間半かかる。
「僕は・・・いったい何をしてしまったんだろう？　ねえ？　撮影は・・・・・・」
撮影は・、なんなのだろう？　なんと問いたかったのか、主演俳優はすっかり肩を落とし、ひたすら悲痛な面もちで物思いに沈んでいった。

刀脇　力丸（たちわき　りきまる）
32歳。愛称リッキー。
シルベスター・スタローンに憧れ俳優を目指し、24歳の時自ら企画した青春ボクシング映画（ビデオ映画）で本物のプロボクサー相手に本物の試合形式でファイトシーンを撮影し、これをきっかけにブレイク。多数のVシネマにアクション物を中心に出演し、特に男性ファンから「リッキー兄い」と慕われているが、30歳を前にVシネマへの出演は減り、テレビの刑事ドラマやバラエティー番組にも出演するようになり、強面（こわもて）の割に宴会的トークが上手く、　近年人気はお茶の間に拡大している。女性雑誌の「セクシーな男性」投票でも上位に名前が挙がっている。

人気俳優が撮影中に人を死なせる事故を起こしたニュースはたちまちテレビ、ラジオ、ネットで報道され、大きな反響を生んだ。
詳細が分かっていく内、事故ではなく事件の可能性が高いと分かり、マスコミの報道は急激にヒートアップしていった。

警察の取り調べで、
真っ先に疑われたのがアルコールと薬物で、刀脇力丸は念入りな検査を受けたが、いずれも反応は出なかった。
事務所、自宅も家宅捜索を受けたが、麻薬の類は発見されていない。
警察署で刀脇は5日間の取り調べを受けた。
刑事の問いに、刀脇は思いだし思い出ししながら精一杯誠実に答えた。
「僕は、たいした俳優じゃありません。乱暴なアクションしかできない大根役者だって陰で言われているのも知っています。だから僕はどんな役でも懸命にその役になりきって演じるよう努力しています。でも、まさか、いくらモンスターに扮したからって本当に人を殺してしまうほど自分を見失う事なんて……。
あの時だって、危険なワイヤーアクションでしたから、段取りを間違えないようにしっかり意識していました。
でも、途中から分からないんです……。
警官に囲まれて、僕が吠えて……、そうです、吠えている内に……、分からなくなっちゃったんです……。すっかり意識が飛んじゃって、カットの声で我に返って、あれ？もう終わったの？って思って、そしたらなんか様子が変で……、僕の足下に助監督さんがしゃがみ込んで、そこに……、そこに……、彼が……」
「藤原洋一郎さん」
「え？　誰……です？」
「君が死なせてしまった相手の俳優さんだよ。彼とは？」

「いえ、まったく面識はない‥と思います。スタジオに入って、挨拶をしたのが初対面だったと思います」
「そう。彼を、故意に殺したということは？」
「ありません！　絶対に！　知らない人ですよ？　殺そうなんて、思うわけありませんよ！」
「そう」
「そう‥‥です‥よ‥‥‥‥‥」

藤原　洋一郎
２５歳、俳優。
映像制作の専門学校を卒業後、芸能事務所に所属しプロの俳優として活動。しかし大きな役に付いたことはなく、実際は警備のアルバイトで生計を立てていた。事務所の見立てでは熱意があり、どの現場でも熱心に取り組んでいたが、俳優としての華がなく、諦めずに長く続けていればいずれはもしかしたら名バイプレイヤーと呼ばれる俳優にはなれていたかも知れない。
将来ある若者が夢半ばで、事故で、命を絶たれたのはたいへん惜しまれる、と事務所社長はコメントした。
刀脇力丸の大手事務所とは別の事務所で、事務所の調べる限りこれまで両者がいっしょの現場で仕事をしたことはなかったはずだ。

アルコール、薬物、故意の殺人、
次に疑われたのは、
特殊メイキャップアーティストだった。

０３　特殊メイク

スタジオスカーレッドを主催する特殊メイクアップアーティスト

菅原一馬（すがわらかずま）

通称スカー、３５歳、独身。

近年競争の激しい特殊メイク業界において、着実に確かな仕事をこなしている中堅のメジャーなアーティストだ。

長身痩せ形で、いかにも芸術家らしい大きな鋭い目をしたなかなかのイケメンだ。

閑静な住宅街にあるアトリエを訪れた二人の刑事を、いささか迷惑そうに目にかかる長髪を細い指で掻き上げ、

「まあ、どうぞ」

と赤いドアの内に招き入れた。

ここはスタジオスカーレッドの第１スタジオで、菅原の住居も兼ねている。仕事が順調でもっと大きな第２スタジオを映画撮影所の敷地に間借りしている。スタッフたちはたいていそっちで仕事をし、こちらは菅原が個人的なアトリエとして、また急ぎで徹夜仕事をするときにはこちらを使うことが多い。

ドアをくぐった途端刑事二人はギョッと思わず立ち止まった。

天井の高いストンとした空間の中央に、

作業台の上に手足のない女の艶めかしい胴体が載せられ、その裂かれた腹の中にはひびの入った大きな卵が収まっている。

中２階のあるロフト形式のアトリエは入った瞬間に独特のヒヤリとした臭いがした。中央に大きな換気扇の筒が天井から下りている。その下に女の胴体はあるのだが、

「こりゃあ、ちょっとした壮観ですなあ」

４０代と２０代の刑事コンビは四角い空間を見渡して感嘆した。

中央の胴体以外にも、まるで、バラバラ死体の製造工場のようである。
壁いっぱいに立てられたがっしりしたフレームのキャビネットに納められたコンテナからはいっぱいに詰まった顔や腕や足や胴が、溢れていた。それも、生々しい断面の覗いた物もある。
工具類もドリルや電動ノコギリが大小多数揃えられ、怪しげな薬品の大きな缶やバケツが多数並べられている。
その悪趣味なオブジェに思わず眉をひそめている刑事たちに菅原は自嘲気味の笑みを浮かべ、女の胴に歩み寄って紹介した。
「ま、あんまり高級な芸術品じゃありませんね。これね、女の腹が割けて卵が現れて、その卵が割れてキメラが産まれるって仕掛けでしてね」
よく分からんという表情を浮かべる刑事に、
「キメラってのは、人間と化け物の合いの子です。ヌエ、って言えば分かるでしょう？」
と言い、４０代の方はああと頷いた。
「で、ご用件は？」
「刀脇力丸に施した特殊メイクについてちょっと」
「あ、そう。ところであのマスク、返してもらえるんですか？」
菅原が事故後刀脇からはがしたウルフマンのマスクはそのまま警察に押収されている。
「ええ。いずれは」
「そう。ま、いいや。どうせもう使い物にならんでしょうから」
菅原の気取ったポキポキした言い方に２０代の刑事はカチンときた。それをチラッと見逃さず、菅原は言った。
「あれ作るのにどれだけの手間がかかっているか、知らないでしょう？　それにデリケートな物なんでね、管理が悪けりゃすぐにボロボロになっちまいますよ。
こんなことしていて、異常な奴とお思いでしょう？　でもね、わたしらの仕事は常にチームでね、人間関係が大切なんですよ。わた

しは刑事さんが思っているほど変な人間じゃありませんよ。ま、多少趣味が変わっているのは認めますがね」
「いや失礼。お気を悪くなさらずに。
我々が知りたいのは、あれの材料なんです」
４０代の刑事が鼻をくんくんして、顔をしかめた。
「これ、気分が悪くなりませんか？」
「ああ、そう。わたしは、とっくに慣れちゃいました」
菅原は歯を見せて笑い、顔をしかめた刑事もわざとらしいお芝居を自分で笑った。菅原は
「でもそうだなあ、確かによくないですね。わたしらも意識して換気には気を付けてます」
と天井を指して言った。さらに。
「そう、いけないなあ、シンナーで頭がスカスカになっちゃってるのかも知れない。変な幻をよく見ます・・・なんて冗談を警察の人の前で言っちゃあ拙いですか？」
「おっほん。それはま、聞かなかったことにして、実際どうです？
あのマスクやメイクの材料の中に、そうした、感覚を麻痺させるような成分が含まれている物はありませんか？」
「なるほど、それでリッキーがおかしくなって暴れた、と。もしメイクが原因なら、殺人の罪はわたしが問われることになりませんか？」
「それは、多少は責任を問われるかも知れませんが」
菅原は口に笑みを浮かべて手で刑事を遮った。
「いや、いいです。ちゃんとお話ししますよ。まったくない、とは言えないでしょうね。でも、実際のところ、現在はまずないと思いますよ？　確かに以前は物凄く臭かったんです。肌にもよくなかったと思います。でも今はすごく改良されて、例えば医療用のシリコンとか、化粧品のファンデーションにも使われるパテーとか、健康に害のない物に変わっています。臭いのする物はうんと少なくなったし・・というのはわたしの鼻じゃ当てになりませんがね。使った材

料は全部お教えしますよ。別に材料に企業秘密もありませんのでね。どうぞ、そちらの専門の方に調べてもらってください」
「それはどうも。ご協力感謝します。ところで、協力的な態度に甘えてお訊きしたいんですが」
「なんです？」
「あなたも、あの現場で、撮影を見ていたんですよね？」
「ええ。その場で事情聴取受けましたよ」
「では今一度お訊きしたいんですがね、
あなたはあれを、どう見ましたか？
あれを、事故と思いますか？
それとも、殺人事件と思いますか？」
「リッキー・・・」
刀脇力丸の愛称をつぶやいて菅原スカーはしばらく考え、言った。
「彼は、いい奴ですよ。スターになっても全然おごったところはなかった」
「と言うことは、以前にも？」
「彼の、『灼熱？ホワイト・バーン』ってVシネマ知ってますか？
彼がボクサーを演じた彼の出世作ですよ」
ああ、と２０代の刑事が頷いた。２４歳の刀脇が自ら企画して主演したビデオ映画で、その獣のようなファイトシーンが今回の事件に通じる彼の凶暴性を表している、と連日ワイドショーで繰り返し取り上げられている。菅原が言う。
「あれ、・・もう8年前になるのかな？　あれにわたしも参加してましてね、ほら、殴られた傷とか血糊とかのメイクでね。わたしも、27か、まあとにかくなんでもやってた頃ですよ。彼も若くて、とにかく真剣でしたね。これで勝負するんだ、って。体育会系の乗りで、みんな、いっしょにやってくれえ！って、わたしも乗せられた口で」
菅原は懐かしそうに嫌味のない笑みを浮かべた。
「いい奴でしたよ。それは久しぶりに会ったあの日も、変わってな

かった」
「その映画以来の再会で？」
「ええ。ああ、ライフマスク：特殊メイクのマスクを作る土台の石膏の面を本人の顔から採る作業があるんですが、それはわたしは他の仕事で、スタッフに任せたんですよ。わたしが会ったのは正真正銘あの日の朝で。彼、わたしのことも覚えていて、がっしり握手してきましたよ。
：：：あの光景は、わたしも衝撃的でしたが、わたしは事故だと思います。彼に何が起こったのかは分からないが、彼は殺人を犯すような人間じゃあありませんよ」

０４　マスター・パピー

俳優の死から5日後、捜査の結果事故の可能性が高いということで刀脇力丸は拘置所から釈放された。
刀脇は待ち構えるカメラの前で憔悴した様子で深々と頭を下げ、自分が死なせてしまった若い俳優とその家族に深く謝罪した。
刀脇の所属事務所はホームページ及び報道各社への文書で刀脇力丸を無期限謹慎処分とする旨伝えた。これは刀脇本人の強い意向も含まれてのことである、と。
事故から7日もするとワイドショーは次のネタに軸足を移し、刀脇がテレビに取り上げられる時間は急速に減っていった。

ところが、ネットで一つの原因が指摘された。

《マスター・パピーの復讐ではないか？》

と。

マスター・パピー
とは何者か？
催眠術師である。
テレビでたまに登場し、タレントや若い女性相手に催眠術を面白おかしく披露してみせる。

マスター・パピー
本名　益口　寿夫（ますぐち　としお）
５２歳。

不気味な容貌をしている。

彼は舞台に顔を真っ白に塗り、髪の毛を緑色に染め、シルクハットを被ってタキシード姿で現れる。
映画「バットマン」でジャック・ニコルソン演じた「ジョーカー」を思い出してくれればよいが、マスター・パピーは、でっぷりと太っている。
それも、ちょっと日本人には珍しい太り方をしている。
顔面はあまり肉が付かず、顎から下がまるで喉を膨らませたカエルみたいにボヨンと太っているのだ。
例えば、例に挙げるのは申し訳ないが一時期「スターウォーズ」の御大ジョージ・ルーカス卿がこういう：自身のキャラクター「ジャバ・ザ・ハット」みたいな太り方をしていて、顔だけ端正で顎と首がやたらと膨れた姿に「まるで自分がＳＦＸみたいだ」と奇異に感じた方もいると思うが、どうやら欧米白人種にはこうした太り方をする人がけっこういるようだ。

マスター・パピーも顔そのものはくっきりとした二重の目をして日本人離れしたアラン・ドロンのようなハンサムな顔をしているが、それがでっぷりとした丸い顎首に載っかっていると、まるでお面を載せているように不気味だ。
本人もそれを売りにして、西洋の怪しい魔術師を気取って観客を脅して、楽しませている。

さて《マスター・パピーの復讐》とはどういうことか？
事故の起こる2週間前、刀脇力丸はあるバラエティー番組にゲスト出演していた。
海外のテレビ番組から面白いネタをピックアップして紹介する人気番組で、この日はイギリスから催眠術でダイエットに成功したというビデオを紹介していた。催眠術で肉体を操るといったような魔法のようなものではなく、催眠術で食欲を抑えたり、体を動かしたくなったりという気持ちをコントロールすることで、ある程度の期

間を経てダイエットに成功したというごくまともなものだった。
このビデオが紹介された後、催眠術師マスター・パピーがゲストに呼ばれ、ちょっとした催眠術実験を披露した。
タレントの女の子に催眠術を掛け、犬のように男性タレントにじゃれさせるというちょっとエッチなものだったが、催眠術は成功し、じゃれつかれた男性タレントたちはデレデレと喜んだ。
刀脇力丸も困った顔をしながら喜んでいたが、「じゃあ俺にも掛けてみてよ？」と持ちかけた。
ミスター・パピーは一瞬慌てながらも「お望みとあらば」と引き受けた。
ミスター・パピーは刀脇に向き合い、小型の金の懐中時計を目の前にぶら下げてゆっくり揺すりながら「あなたはだんだん眠くな～る」とやりだした。ところが刀脇は目をぱっちり開けてまるで眠くなる様子はない。するとレギュラーのベテラン芸人が後ろからオモチャのハンマーで「ピコッ」と刀脇の頭を叩いた。刀脇は笑いながらくうーっと眠り、フランケンシュタインのモンスターのように立ち上がり、マスター・パピーを抱き上げ、背中を持って頭上に高々持ち上げ、「おい、こら、降ろせ！」とじたばたするマスターをぐるぐる大車輪し、よいしょと下に立たせた。着地したマスターだったが、目が回ってぐらぐら歩いてぶっ倒れてしまった。５０過ぎのマスターに男性たちが慌てて駆け寄ったが、マスターは腕を振り回して怒り、プンプン怒って、ふらふらしながら退場していった。ニヤニヤ頭を掻く刀脇はまた頭を「ピコッ」とやられて会場の笑いを誘っていた。

と、これを指して《マスター・パピーの復讐》を示唆するわけである。
実はこのバラエティー番組のやりとりはテレビのワイドショーでも取り上げられていたが、それは刀脇の「やりすぎの暴力」を例示するだけで、被害者の「催眠術による」復讐という見方は、馬鹿馬

鹿しくて、どこのテレビもしていなかった。
しかし一応そういう疑惑が出たので、刑事二人は埼玉のマスター・パピーこと益口寿夫の自宅を訪れた。

家を訪れた刑事を益口氏は渋々迎え入れた。駅から幾分離れた閑静な住宅街の、ごくふつうの一戸建てである。
家はごくふつうだったが、玄関に入った刑事二人はスタジオスカーレッドに続いてまたもギョッと立ち止まることになった。
靴箱の上に、上がりがまちに、竹の格子の向こうの階段の一段一段に、たくさんの

人形たちが座っていた。

奥の廊下にも端にずらりと、主に青い目のフランス人形が、お行儀よく並んで座っていた。
「たくさんいるとちょっと不気味に見えるかも知れないですが、一人一人はとてもかわいいんですよ」
と、益口氏はちょっと照れたように恥ずかしそうに笑って言った。不気味だ。
益口氏52歳は独身である。
「立ち話もなんですから、ま、どうぞ」
と通された居間も、あちこち人形たちが座っていた。
「お茶、入れますね」
「いえ、どうぞおかまいなく」
と刑事は遠慮したが、益口氏は台所に引っ込んでいった。
人形たちに囲まれて、まるでじっと見られているようで、刑事二人は実に居心地の悪い思いをした。
「お待たせしました」
益口氏はお盆に載せてふたを被せた湯飲みを二つ運んできて、ちゃぶ台の向かいの刑事たちの前にそれぞれ置いた。

「いやすみません」
刑事たちは居心地の悪いまま煎茶をすすった。
益口寿夫氏は、
白粉を落とすと染みだらけの茶色い肌をしていた。くっきり二重のハンサム顔も、年以上に老けたお爺ちゃんに見えた。髪の毛は総白髪で、緑の染料が薄く残っている。
「あのー：」と益口氏は気弱そうに心配顔で訊いた。
「刑事さんがおいでになったのは、わたしがリッキーさんに催眠術を掛けて人を殺させた：という疑惑をお持ちだからなんでしょうか？」
「まあ、そうなんですがね」
素顔はずいぶん気弱なマスターを気遣って４０代の刑事は困ったような笑顔を見せて言った。
「わたしたちもね、一応そういう専門の捜査官に聞いて、そんなことはあり得ない、って分かっているんですが、ま、世間の疑惑を晴らすためにもですね、警察のお墨付きということで、お話を聞かせていただけませんか？」
益口氏はほっとした様子で、お爺ちゃんぽい物柔らかな目になると話した。
「そうですよ。催眠術で殺人を犯させるなんて、ナンセンスです。催眠術のメカニズムから言っても、それは不可能です」
あ、と刑事が手を上げて訊いた。
「失礼ですが、益口さんは、本当に催眠術を使えるんですか？」

０５　催眠術の話

「もちろんですよ」
と益口氏はいささか気色ばんで語気を強めたが、すぐに穏やかに話し出した。
「まあ疑われるのも仕方がない。種を明かしますとね、テレビでやるショーの８０％はお芝居です。いえ、出来ないんじゃなく、準備に時間がかかってたいへんなんです。８０％はお芝居、後の２０％は、仕込みです。仕込みなんて言うとインチキに聞こえるでしょうが、それが本当の催眠術なんです。
いいですか。
催眠術を一言で言えば、それは、信頼関係です。
術者が対象と深い信頼関係で結ばれて、相手を限りなくリラックスした状態に導いてやり、相手の隠し持っている願望を解放してあげるんです。
その結果現れた行動がいかに奇妙なものでも、それはその人が『やりたい』『やってみたい』と心密かに思っていた願望なんです。
その人が絶対にやりたくないと思っていることは、どんなにリラックスした状態を作ってやっても、必ず拒否されます。それを無理にやらせようとすれば、たちまち信頼関係は崩れ、もう２度とその人は催眠術を受け付けなくなってしまいます。
それだけ深い信頼関係を築くには、当然それなりに長い時間が必要です。スタジオでちょっと金時計を揺らしただけで相手の他人に対する警戒感を取っ払うなんて無理ですよ。だからそうしたショーを見せるときには事前に準備、信頼関係を築く時間が必要なんです。ま、中にはごく稀に非常に暗示にかかりやすい体質の人もいるが：：刀脇さんに関してはまるっきり逆です。あの人は、強情です。他人の言葉に無防備に身をゆだねるようなことは：：長い時間を掛けても無理でしょう。あの人は、催眠術には掛かりません。

…一つ可能性を言えば…

本人に強い願望がある場合、他人から『いいよ、どうぞやりなさい。許してあげるから』と言われれば、それを言い訳に、自己暗示をかける…、あの人が『殺していいよ』と言ったから殺してしまいました、と自分を欺くことは…あるかも知れません。

しかしこの場合も、刀脇さんにその相手の、藤原さん、を殺したいという強い動機があればの話で、刀脇さんにそれはないんでしょう？」

どうやら益口氏はワイドショーなどで熱心に情報収集していたようだ。

「ふむ」と刑事は頷き、言った。

「やはり催眠術で人を殺させるのは無理なんですな？」

「無理です」

「なるほど。分かりました。ところで、あの番組ですがね、女の子を犬にしちゃったでしょう？　あれは、どっちだったんです？」

「あれねえ」

益口氏はまた恥ずかしそうにニヤニヤ笑った。

「もちろんお芝居です。そういう台本を、あっちの方から出してきたんです。わたしも台本通りにお芝居しただけでしてね」

「刀脇さんも？」

「あれ…」

益口氏は今度は渋くムッとした顔になった。催眠術師のくせに簡単に気持ちが表に出る人だ。

「あれは…、アドリブですよ、刀脇さんの。本人はそう言って、後で楽屋に謝りに来てくれましたがね、たぶん、他の人にそそのかされたんじゃないですか？　わたし、あの番組には前にもオモチャにされたことがありますからねえー…」

「刀脇さん、楽屋に謝りに来たんですか？」

「ええ。あの人は…、本当は礼儀正しいいい人ですよ」

「そうでしたか」

スカーレッドの菅原といい、益口といい、刀脇力丸に対する評価はすこぶる良い。

大した話にもならないので刑事たちは辞去しようとした。
そこへ玄関の呼び鈴が鳴った。
「ああ、ちょっと失礼」
と益口氏が部屋を出ていくと、やがて、「ああ、清水君か。えー・・と、どうしようかな」と声が聞こえた。
刑事二人は頷き合い、立ち上がった。

玄関に出ていくと益口氏と同年代の男性が開けたドアの外に立っていた。
「お邪魔しました。我々はもうけっこうですので」
と刑事が声を掛けると、玄関に下りた益口氏は迷いながら
「えーと、こちら、清水二郎君。わたしのマネージャーをしてくれてます」
と男性を紹介した。
「ああ、そうですか。それはどうも」
と刑事二人はお辞儀し、まあついでなので訊いてみた。
「あなたは、刀脇力丸さんと会ったことは？」
痩せてひょろ長い清水氏は
「いえ、僕はありません」
と答えた。
「そうですか。それではけっこうですよ」
と靴を履こうとして、４０代の刑事はふと二人を見比べて、訊いた。
「お二人は・・・、以前は？」
何とはなしに、太っちょの益口氏とひょろ長い清水氏で漫才コンビのような取り合わせだと思ったのだ。
すると案の定清水氏が嬉しそうに言った。

「ええ。わたしも以前は舞台に立っていたんです。彼がマスター・パピー、わたしがパペット・ジミーと言いましてね、コンビでコントをやっていたんですよ」
「ほう、そうですか。どんな感じで？」
まあどうでもいいのだが、嬉しそうな顔をするので世間話で訊いてやった。清水氏はニコニコと話した。
「彼は元々一人で腹話術をやっていたんですよ。わたしは一人でしゃべくりをやってましてね、まあ、二人ともあんまり売れなかったんですよ。演芸場で知り合って二人でやけ酒飲んで、いっしょに組んでやってみるかとなりましてね。で、わたしが彼の操る腹話術人形に扮して、彼の腹話術に合わせて口を動かしながら、タイミングを見て勝手なことをやるんですよ。で、彼は困って、人形と喧嘩になって、ドタバタの展開になる、と。これはけっこう受けましてね、いろいろお呼びが掛かるようになったんですが…、わたしは連れがおりましてね、貧乏で苦労掛けて体を壊しちゃいまして、わたしは家内の看病をしなくてはならなくなった。彼は一人で舞台に上がらなくてはならなくなって、そこで、勉強していた催眠術を、披露したんだよね？」
清水氏に話を振られて益口氏は照れ笑いを浮かべながら話した。
「ええ。彼を人形にして腹話術をやっている内、なんだか本当に彼を操っているようないい気分になっちゃいましてね、こりゃ催眠術ってやつだなあと思って、勉強してみたんですよ。やりだしてしばらくしたらテレビで同じような催眠術ショーが流行りだして、わたしも負けてられないなと、今の怪しいマジシャンのキャラクターを作り上げたんですよ。おかげで催眠術ブームが去った後もこうして細々ですが生き残ることが出来ましてね」
ニコニコ誇らしげにする益口氏に清水氏は申し訳なさそうに言った。
「わたしの方はすっかり舞台から下りてしまって、他の仕事を探そうかと思ってたんですがね、益口君がマネージャーをやってくれな

いかって声を掛けてくれて、それでこの業界で生き続けています。
本当に彼には感謝していますよ」
「いやいや、大して売れない芸人のおもりなんかさせちゃって、かえって悪かったねえ」
「いやいや」
二人の友人は微笑ましく謙遜しあった。
「なるほど、そうでしたか。いいお話ですなあ」
と当たり障りなく言って刑事は話を切り上げようとしたが、
清水氏はニッコリ自慢げに言った。
「益口君の催眠術は凄いですよ！　彼は、天才です！」
「天才、：ですか？」
ニッコリ笑う清水氏に対し、向こうを向いた益口氏の顔は伺い知ることは出来なかった。

06　「スーパーウルフマン」

さあゲームだ！
主役は、君だ！
世界は君のために用意されている、この世界で起きることは
すべて君のために準備されたものなんだ。
気に入らない奴がいる？
そうだよ、そいつは君のために世界が用意した「敵」なんだよ。
さあ、ぶちかませ！
そいつをやっつけろ！
君のパワーゲージはレッドゾーンを突破している。
準備は整っている。
君は、スタートボタンを押した。
ゲームはもう、始まっているんだ。
後は君が、
そいつを思いっきりぶちのめしてやりゃあいいんだ！
日頃のストレスなんて、スカッと吹っ飛んでしまうぜ？！
さあ、
ぶっ殺せ。

一つ、大きな事故の影響があった。
発売間近だったＰＢ３用ゲームソフト「スーパーウルフマン」が発売延期になり、ゲーム内容に修正が加えられることになった。
「スーパーウルフマン」とは言うまでもなく死亡事故を起こしたＣＭ撮影の商品である。
高性能ゲーム機ＰＬＡＹ　ＢＡＳＥ３の製造発売会社ＳＵＮＮＹのプロデュースの下、その高い映像処理能力をフルに活用した迫力

満点のバトルシーンを売りにしたアクション大作だったが、皮肉にもそのリアルなバトルアクションが問題になってしまった。
実際ウルフマンに変身した主人公のアクションには、敵を地面に叩きつけて「殺す」というものがあった。
既にゲーム雑誌に大々的に記事が掲載され、発売を1ヶ月後に控えて大規模な広告活動が開始された矢先だった。
発売1ヶ月前にようやくCM撮影とは遅いように思えるが、これは第2弾CMで、人気俳優を起用して特殊メイクとSFXを全面的にフィーチャーしたCMはそのものが話題となり、撮影のドキュメントも大いに広告活動に貢献してくれるはずだった。
商品のDVD－ROMは既に工場でプレスが開始されており、急遽ラインが止められ、プレス分はすべてSUNNY本社の倉庫に回収された。SUNNYはもろもろで千万単位の損失を出してしまった。
ゲームの中身の制作は子会社のSUNBRAINが行っていたが、事件から10日目の現在SUNBRAINの制作スタッフは連日徹夜で暴力的なアクションの修正作業に忙殺されていた。

さて、
「スーパーウルフマン」
というゲームの具体的な内容はというと、

主人公はウルフマン＝狼男であるが、
元はふつうのサラリーマンである。
ある夜恋人とデートの帰り、異形の怪物＝狼男に襲われ、恋人は殺され、自分は噛まれて、狼男になってしまう。
狼男は昼間は普通の人間で、夜、月が出ると狼のモンスターに変身してしまう。
狼男となった主人公は謎の組織に追われるようになる。それはどうやら民間の医薬品会社を装ったその実軍と直接つながった軍需産

業の組織らしい。
主人公は昼は普通の人間として医薬品会社の謎を探り、夜になるとモンスターに変身して武装した組織の部隊と闘うことになる。
このゲームの特徴はゲーム内に１時間＝２４時間の明確なタイムテーブルを設定している点だ。
人間として活動する時間と、モンスターとして闘う時間と、タイムリミットがあるのだ。
人間であるときには組織の部隊から隠れて行動しなくてはならず、モンスターであるときには人間としての行動は大幅に制限されてしまう。状況を見極めて行動を決するシュミレーションゲームの要素も加味されているのだ。
何日間で状況をクリアするかでその後の展開も変わってくる。シナリオも相当複雑に作り込んであるのだ。
アクションに影響するのが、月齢だ。
変身するモンスターは月の満ち欠けで能力が違ってくる。
新月の時は人間よりちょっと強いくらいだが、武器が扱える。
月が満ちて行くに従ってパワーアップしていくが、その分コントロールが大雑把になっていき、
満月で最強の「スーパーウルフマン」になるが、パワーが完全にモンスター級で破壊力抜群な一方、バーサーカー状態で、コントロールはめちゃくちゃ悪い。
コントロールが悪いのはアクションゲームとしてはマイナスだが、その代わり美麗なＣＧで迫力満点の破壊が楽しめ、爽快感を満足させる。

それだけ凝った大作であるから、そのマイナーチェンジも作業は膨大なのだ。
ＳＵＮＮＹはけちが付いて購買者の熱が冷めてしまうのを恐れて出来るだけ早期に発売したい意向だが、それはＳＵＮＢＲＡＩＮスタッフの頑張り次第である。

さて。

商品としてのゲームの思惑とは別に、
このゲームに関係すると思われる、

第２の事件が起こった。

深夜２時。
折しも快晴の天頂に十五夜の月が目が痛くなるほど真っ白な光を放って輝いていた。
東京外縁のベッドタウン、１台の車が駅近くの高層マンションの前で止まった。
シルバーパールの高級セダンの助手席のドアが開き、２０代のスーツ姿の女が降りてきた。
しかし女は運転席に回るとガラス窓をコツコツ叩き、ガラスが下に降りると、窓越しに運転手の男と口づけをかわした。
二人は恋人同士で、ホテルでひとときを過ごした帰りなのだ。
顔を離してニッコリ笑った女は、車を回ってマンションのエントランスに向かうと、軽く振り返りバイバイと嬉しそうに手を振った。
恋人のなかなかイケメンな男もニコリと笑って手を振り返した。
女が向こうを向き、男も見送りながらさて発進のタイミングを見ていると、突然、ドンッ、とルーフに衝撃が降ってきた。
なんだ?！と慌てると、ルーフから飛び降りた物がエントランスのパネルで暗証番号を押している女の背後に物凄い勢いで迫った。
え?、と振り返った女は、
「ぎゃっ・」
と悲鳴を上げる口を、ガンと手で掴まれ、というより殴りつけられ、エントランスのガラス戸に頭を打ち付けられた。
クワンと衝撃が突き抜け、鼻の奥がツンときな臭く痛んだ女は、

なんなの?、と相手の顔を見た。
女は一瞬痛みも忘れてギョッと目を見張った。
黒いジャンパーと黒っぽいズボンをはいた男の顔は、
半獣のモンスターだった。
「・・・・・・・・」
女は悲鳴を上げたが、がっしり押さえた男の手に声になるのを阻止された。
女が暴れると、男はもう一方の、左手を、高々振り上げ、振り下ろすとバリイイッと乱暴に女のブラウスの胸を引き裂いた。
「・・・・・・・・」
無言の恐怖の悲鳴を上げる女を、モンスター男は、ガンッ、ガンッ、とその後頭部を思い切りガラスに打ち付けた。ビシッ、ビシッ、と分厚いガラスにひびが走り、赤い汚れが付いた。
立て続けの激しいショックに意識朦朧とした女を、モンスターは。

「エリカあっ!!!」
恋人の男は叫ぶと、とっさに武器として懐中電灯を掴んで、ドアを開けて飛び出した。
「この野郎っ!!」

モンスター男は両手で女の細い首を掴むと、懐中電灯を振り上げて襲いかかってくる男を、女を振り回してその脚で殴りつけた。
「うわっ、きさま、やめろ!」
女を投げ捨てたモンスターは、
「うわっ」
ガンッ、とストレートの拳を男の顔面に叩き込んだ。
男は後ろに吹っ飛び、ガンとコンクリートに後頭部を打ち付けて、大の字になって昏倒した。
モンスターは動かない女の首の後ろと腰を持って高々持ち上げると、

さんざん頭を打ち付けてひびの入ったガラス目掛け、
矢のように女を打ち込んだ。
グッシャアン。
分厚く弾力のあるガラスは砕け散ることなく、女の首を飲み込んで、体をだらりとぶら下げた。
モンスターは数歩下がってだらんとした女を見て、
両の拳を握りしめると、

「うおおおおーーーっ！
うおおおっっ、
おおおおおおおおおおおーーーっっっ！！！」

と腹の底から咆哮を上げ、ダッと、誰も通る者のない道路を走り去った。

07　マスク

朝7時、撮影所の第2スタジオに向かって家を出ようとした菅原はタイミングぴったりにギッと止まったパトカーにギョッとした。後部ドアが開いて、あの40代の刑事が「や、どうも」と頭を下げた。

「捕まえられて良かった。ついでがありましてね、お送りしますから、その前にちょっとおつき合い願えませんか？」

菅原はたまたまゴミ捨てに出てきた向かいの家の主婦に「おはようございます」と挨拶して、実に迷惑そうに開かれたドアに入った。

「なんですか？」

「いやすみませんね。実は今現場から回ってきたところでしてね」

運転しているのは制服のお巡りさんで、若い方の刑事は乗っていなかった。

「現場？」

菅原は出がけまで見ていたテレビのニュースを思い出して険しい目になった。

「マンションで若い女性が殺された？」

「そうです、それです」

「その事件に、わたしが関係あるんですか？」

「いや、参考までにご意見をお聞きしたいと思いまして。いやあ、世の中便利になったものですなあ、これ、そのマンションの防犯カメラの映像なんですが、いかがです？」

刑事の操作したノートパソコンの映像を見せられて、菅原はギョッとした。

エントランスの中から表のガラス戸全体を映した映像に、今、女性の後ろ姿が顔を掴んだ男に乱暴に頭をガラスに打ち付けられている。

菅原は眉をひそめて、目は見ながら、顔を逸らし気味にした。

「こういうのは見慣れてませんか？」
「これは映画じゃないんでしょう？　こんな物、一般人に見せていいんですか？」
「ま、あまりよくはないんですがね、ですからこれ、ご内密に。ところで、見て何か気づきませんか？」
「何かって言うと？」
「これじゃあ分かりづらいが、もう一つ、外のカメラの映像もあるんですよ」
刑事はパソコンを自分に向けて、別の窓をクリックし、菅原に見せた。
「これでどうです？」
今度はひさしに取り付けられたカメラの映像で、斜め後ろから人物を膝上から頭の上まで捉えている。
菅原は目をそばだて、うん？と軽く首をひねった。
「犯人は、お面をかぶっているようですね？」
斜め後ろから、犯人はほぼ向こうを向いているが、逆立つ硬い髪と、なんだか通常から尖って見える耳が、どうも作り物っぽい。
「今、こっちを向きますよ」
さんざん頭を打ち付けて気絶させた女を、今度は執拗に首を両手で締めて、何か気づいたようにこちらを振り向いた。
菅原は「あっ」と声を上げ、刑事は「はい、ここ」と手を伸ばして映像を一時停止した。
ぐわっと口を開けて吠えるようにした顔は、半獣のモンスターの顔だった。
「これは！・・・・」
驚きを隠せない菅原に刑事は
「そうでしょう？」
といささか得意そうに言った。
そっくりだ、菅原が作ったウルフマンのマスクに。
「似てますね・・」

菅原は背もたれに深く腰を沈めて、諦めたように認めた。
「いや、しかし」
もう一度よくよく見て、言った。
「これはわたしの作った物ではありませんよ？」
「ほお。これで、分かりますか？」
「そりゃ分かります。わたしが作ったのはリッキー本人に装着させるワンセットのみで、あれは極力リアルに見えるようにリッキーの顔つきを殺さないように細かいパーツごとに貼り付けていくタイプです」
「ああ、そうでしたなあ」
「でもこれは、フルフェイスのかぶり物のマスクです。わたしは、このタイプは作ってませんよ」
「なるほど」
刑事は納得して頷いてみせ、自分も画像を見て、訊いた。
「ま、あなたの作った物でないとして、プロの目から見て、どうです？　これ、ふつうに店で売ってるものですか？」
「いや…」
菅原は考え言った。
「元が狼男ですから、似たような物はいくらでもあるでしょうが、このデザインは…、多分まだ商品化はされていないと思いますよ？
わたしはちょっと仕事の分野が違うんで断言は出来ないが…」
静止画像の中の吠えるモンスターは、鼻や耳にその特徴はあるものの、まだ変身の初期段階で、狼男というより人の怒りが獣化したやはり、ただのモンスター、という方が相応しい。
菅原は監督のコンセプトによってそう作ったのだが……
「確かに……、何故だろうな？……」
疑問に思って考え込んだ。刑事がその様子に訊いた。
「なんです？　何か気になることが？」
「ええ、まあ……。ああ、これね、別にわたしがデザインしたわけではないんです」

「ありゃ、そうなんですか？」
「だってこれ、ゲームのキャラクターですから。わたしはゲームのデザイン画をそのままリッキーの顔に当てはめて作っただけですから」
「ああ、なるほど。そうなんですか」
「ええ。刑事さん、ゲームの内容は知ってます？」
「まあ、ざっと一通りは」
「ウルフマンには月齢に合わせて１６パターンのデザインがあるんです。人間からスーパーウルフマンに徐々に段階を追ってね。わたしは監督の指示でその３日目のデザインを元にマスクを作りました。だからモンスターとしてはかなり人間っぽいでしょう？　ですからね、ふつうキャラクター商品を作るなら、もっとキャラクターのはっきりした、完全体のスーパーウルフマンを作ると思うんですよ。こんな中途半端ななんのキャラクターか分からないようなものは・・・、作らないんじゃないかなあ？・・・」
「なあるほどねー。じゃあ尚更これは特別なお面な訳ですな？」
「そうなると思います。撮影の具体的な画像は表には出てないんですよねえ？」
「ええ。証拠物件として押さえて、関係各所にも公表しないようにお願いしてあります」
「ゲームの画像は既にゲーム雑誌に多数出ていると思いますが、ＣＭ撮影にリッキーがウルフマンに扮することは知られていても、一般の人なら当然スーパーウルフマンの姿を連想するでしょうね。この姿を思い浮かべる人は・・、おそらくいないでしょう。ＣＭのコンセプトは、人間のリッキーがモンスター化して、警官を投げ飛ばして、怒りの咆哮を上げ、その口のアップを撮したところで、ゲームのＣＧムービーに切り替わるんですよ、スーパーウルフマンが暴れ回るシーンにね。これだけ実写と遜色ないリアルな迫力ある映像でゲームが楽しめますよ、というわけです」
「なるほど。つまり、このマスクはゲームよりも直接撮影のメイク

を参考にしているというわけですね？」
「そう：なっちゃいますね」
「ということは」
刑事はニンマリ笑って言った。
「容疑は撮影関係に絞っていいわけだ」
菅原は自分で情報を提供しておきながら渋い顔になった。刑事は笑って、訊いた。
「それで、では誰がこのマスクを作ったと思います？　素人目だが、なかなか良くできてますよねえ？」
「ええ」
菅原は目を細くして画像をチェックして言った。
「この粗さではっきりとは言えないが、わたしもかなりいい出来だと思います。プロの撮影にも使えるんじゃないかなあ？：。一般のホビー商品だとしたら、かなり高額の限定品でしょう」
「ズバリ、あなたの周りでこれを作れるとしたら？」
「いや、それは：、プロなら作れますよ。素人でも腕のいい人なら作りますよ。特定は出来ないです」
「ふむ。事情的にどうです？　作れる、じゃなく、作りそうなのは、誰かいませんか？」
菅原は物凄く嫌そうな顔をした。
「そりゃあ：：、スタッフはみんなこの手の物が大好きな連中ばかりですが：：、わたしには誰とは言えませんね」
「そうですか。いや、まあ、それは我々が」
刑事は思った以上の収穫に満足そうに笑みを浮かべ、菅原は自分たちの周辺に警察の捜査が及ぶことを思ってますます渋い顔をした。ふと、問う。
「この犯人：：、まさかリッキーじゃないですよね？」
「違うでしょう」
刑事はこともなく言った。
「彼のマンションはまだマスコミが張ってます。昨夜から今朝まで、

刀脇は籠もりっきりで出入りはしていません。それに、犯人はそんなに大男じゃないですよ」
「そうですね」
菅原はほっとして言い、改めて訊いた。
「これ、撮影の事故と本当に何か関係あるんですか？」
刑事は肩をすくめた。
「さあ？　まだ分かりません」

０８　犯人像

殺害されたのは都内に勤める２５歳のＯＬで現在怨恨の線で犯人の殺害動機が探られている。

恋人の男性はこちらも鼻の骨を折る重傷を負ったが、一発殴られただけで、一方彼女の方は後頭部の骨が陥没するほどひどく打ち付けられ、直接の死因は首の骨折によるショック死だった。もっともそこに至る以前にとっくに気絶していただろうが。

動機に、彼女、または若い成人女性に対する深い憎しみが想像できた。

現場のマンションは駅前の通りに面し、通りはファッションや雑貨屋、旅行社などが並び、夜間は皆閉まり、広く無人状態だった。犯人は向かいのそうした店舗の脇の狭いところに潜んで襲撃のタイミングを待っていたと思われる。

過去の犯罪歴からそうした類の男性犯罪者がピックアップされ、さらに身体的特徴から容疑者が絞られていった。

被害者の皮膚から犯人の物らしき指紋は採取されたが、それはどうやら参考にならないようだ。人の指紋にしては大きすぎ、犯人はどうやら手にも特殊メイクのグローブを装着していたようだ。

菅原が懸念したとおり警察はスタジオスカーレッドのスタッフにも改めて事情聴取を求めてきた。

スタジオスカーレッドのスタッフは８人。社長の菅原と７人だ。

その中で特に目を付けられて念入りな聞き取りをされたのが、

井上康平（２７）

松浦伸一郎（２４）

の二人だった。

スタジオスカーレッドは来月クランクイン予定の劇場映画大作「幻魔黙示録」の準備に忙しく、菅原も当然そちらをメインに作業し

ていて、刀脇のウルフマンマスクはこの二人が諸作業を行い、刀脇のライフマスク取りも二人で、また二人とも菅原と共に撮影現場にもいた。
井上はモンスターメイクのスペシャリストで、松浦は造形もやるが得意分野はコンピューターとのマッチングだった。
井上は顔中ニキビの潰れた痕だらけで、重そうな目蓋に細い目が隠れがちな顔をしていた。
松浦は逆にギョロッと大きな目をして、顔が細く、歯並びがひどく乱れていた。自分で「オレ、魚類なんで」と冗談めかして言い、性格は軽やかだ。井上はむっつりと重たい。

事情聴取にはまたあの４０代の刑事が相棒といっしょに来た。
彼らが帰った後、菅原はモンスターの型抜き作業の合間にどうしても気になって二人に訊いた。
「どんなこと訊かれたんだ？」
さっさと自分の作業に戻りたい井上はぶっきらぼうに
「別に。前にスタジオで訊かれたのと同じですよ」
と言ったが、警察沙汰を面白がっている松浦は待ってましたと言わんばかりにしゃしゃり出た。
「それがっすね、変なこと訊かれましたよ。井上さん訊かれませんでした？マスター・パピーのこと」
井上は「俺は知らねえ」と言ったが、菅原ははあ？と口を開けて、訊いた。
「誰だっけ、マスター：パピー？」
「催眠術師ですよ、ＳＦＸみたいな顔した」
「催眠術でＳＦＸ？」
考えて、ああ、と思い出した。
「あの白塗りの怪しい奇術師。ＳＦＸ：か」
菅原も思わず悪意のこもった笑いを浮かべた。言い得て妙だ。しかし。

「催眠術師が、どうして？」
「スカーさん、知りませんか？　あの事件、ネットでマスター・パピーの復讐じゃないかって噂されているんすよ」
「知らない。どういうことだ？」
「あの、」
井上が迷惑そうな顔で口を挟んだ。
「俺、ベーガの仕上げしたいんだけど、もういいですか？」
「お、悪い。いいよ、やってくれ」
井上はむっつり軽く挨拶して奥の自分の作業場に向かった。そこには主役の魔界戦士兵衛牙の黒光りする鎧が立っている。
「あっ、おい、井上？」
井上はむっつり振り返った。
「おまえ、ウルフマンのフルマスクなんて作ってないだろうな？」
「そんな暇ありませんよ」
菅原は悪い悪いと手で謝り、行ってくれと手でやった。
見送って、こっそり松浦に言った。
「やっぱり井上といっしょはやりづらかったか？」
「いや、そんなことないっす」
松浦は汚い歯並びを見せて笑った。
「井上さん、これは俺の仕事、これはおまえの仕事ってきっちり分けて、その通りの仕事をしますんで、仕事そのものはやりやすかったですよ」
菅原はチッと舌打ちしながら笑った。
「あいつは変わらねえな。それで、なんでマスター・パピーなんだ？」
松浦はテレビ番組の一件を話した。ふうんと聞いて菅原は
「なるほどなあ」
と頷き、
「サンキュ。おまえも自分の仕事やってくれ」
「はい。あ、オレ、２時から東亜さんでザンバさんとミーティング

なんすけど、あっちのデータもらってきたいんで、早めに行っちゃってかまいませんか？」
「ああ、任せるよ。頼む」
「じゃ」
松浦にはＣＧとの合成作業のコーディネートを任せている。ＣＧはまた別の制作会社で、他にも３つの工房が参加し、なかなか大がかりな特撮映画なのだ。
菅原もやらなければならない仕事がいくらでもあるのだが、ＦＲＰの硬化を待つを言い訳にしばし考え込む。しかし慣れているとはいえひっどい臭いだ。部屋のあちこちでグルングルン換気扇が回っている。直接嗅げば、鼻や唇がただれる。硬化してしまえば問題ないが、もちろんこの素材で肌に直接付ける物は作らない。
そういえば警察から何も言ってこないがメイクの材料に特に問題はなかったようだ。
催眠術……か……、と菅原は考える。
そうか、催眠術。
もしかしたらリッキーはあの間に……、と。

09　第3？の事件

《さあ、変身だ！》

またしてもモンスターマスクの男による殺人事件が発生した。
今度は都心の夜の繁華街、
深夜1時。
華やかなネオン街から小路を奥へ。すると小路と小路が複雑に交わった一角に三角形の古いビルがあった。4階建ての3階に、深夜も営業している金貸し屋があった。表で遊んで、つい羽目を外して、財布の空になった客が青い顔で怖いお兄さんに連れられてくる非合法の高利貸しだ。
そういう店だからドアの前に強面の用心棒が付いていたのだが、そいつが
「あん？　なんだてめえ？」
と一歩前に出たところで、ミシッと、胸骨ごと肺を潰されて声もなく絶命した。
ドアを開けて入ってきた男に
「うおっ、な、なんだてめえ？！」
「ひいっ、な、なんだい、あんた？！」
中にもう一人いた用心棒の男と、金貸しの婆さんがそれぞれ驚きの声を上げたが、
男は頭を掴まれると膝蹴りを顔面に叩き込まれ、もんどり打って倒れ、ぴくぴく痙攣して、すぐに動かなくなった。
「ひいっ、ひええっ」
婆さんは慌てて部屋の奥に逃げたが、三角形の隅に追い込まれ、
「や、やだ、なんだい、あ、あっち行け！　か、金なら、ほほほ、ほら、そそそこに」

と机の上の手提げ金庫を指さし言ったが、男は、バキッと、大きな手で老婆の痩せた顔を三角コーナーに押し込んだ。ビチッと血が飛び散り、老婆はそこから動かなかった。
男は老婆が指さした手提げ金庫を開け、中から札束を掴みだし、ポケットに突っ込むと、部屋を出て、思い出したように廊下に転がる用心棒の死体を部屋に投げ入れ、ドアを閉めて立ち去った。

それから1時間後の深夜2時。
表のネオン街で火事が起こった。1軒のビルの1階からボンッと爆発音が響いて火が出て、激しく燃え、火災警報の鳴り響く中、2階以上の飲食店やマッサージ店から従業員や客たちが慌てて階段を駆け下り、煙の中から逃げ出してきた。平日深夜のことで既に閉まっている店も多く、客もそれほど多くはなかったが、周囲の店も含めて大騒ぎになった。
消防車がサイレンを鳴らして駆けつけ、消火活動を行った結果激しく燃えた火も4時間後には鎮火した。既に空が白々明けている。
火元と見られる1階のキャバクラに踏み込んだ消防隊員たちは絶句した。
黒こげの死体がごろごろ転がっていた。
しかし、どうもおかしかった。
店の女の子たちなのだろう、それぞれバラバラに逃げた様子はあるのだが、それがどうも、出口に向かって逃げたような感じではないのだ。その出口をふさがれて何かから逃げ回った挙げ句、一人一人、結局全員、火の出る前に殺されていたような、そんな印象を受けた。
そしてそれは詳しい検屍の結果証明された。
店の女の子12人、男性スタッフ7人、客の男性2人、全員がひどい暴力を受けて死んでいた。
店の奥の厨房のガスが爆発した火事は、おそらく、犯人が犯行の証拠を消すために起こしたものと思われる。

しかし。
店はすっかり燃えて黒こげになっていたが、ビルを管理する警備会社の防犯ビデオにエントランスを出入りする犯人と思われる黒いコート姿の男の姿が映っていた。
３０代と思われる黒髪をぴっちりオールバックにした目つきの鋭い張り詰めた感じの顔の男だ。
体はコートの上からでも肩や胸板が見るからに筋肉質でがっしりして、アーノルド・シュワルツェネッガーのようだ。
そして。
その服装の人物がもう一つの現場のカメラに映っていた。
三角ビルにも出入り口を階段の壁から斜めに見下ろすカメラが設置されていた。犯罪すれすれのテナントを抱えておこがましいが、これが役に立った。
ビルの階段を上る、下りる、
モンスターマスクの男の姿が映っていた。
あの、ウルフマン未完成版の半獣のマスクだ。
マスクの男はここで大金を強奪し、キャバクラに遊びに入り、何が面白くなかったのかそれとも最初からそのつもりだったのか、店にいる人間を全員ぶち殺し、火を放って去ったのだ。

あのマンションの事件から5日後のことである。
このマスクの男がマンションで女性を強殺した男と同一人であるかは、マスクをしているので、分からない。
しかし新しい事件の犯人は素顔がはっきり映っているので、直ちに全国に指名手配され、新聞テレビにも大々的に顔写真を報じられた。
顔が分かっているのだ、
犯人逮捕は時間の問題のはずである。

１０　変身暗示

「やはり専門家の方に確認していただきたいと思いまして」
と、また４０代の刑事？いつまでも名無しもかわいそうなので？衣川刑事が相棒の稲村刑事とスカーレッド第２スタジオに菅原を訪ねて三角ビルの防犯ビデオの映像を見せた。
また嫌がられるかと思ったら、菅原は熱心に映像を見て、
「違うマスクです」
と鑑定した。
「違いますか？」
刑事たちは驚いた。てっきり同じ物だと思っていた。菅原は頷き、具体的に指摘した。
「前の物も良くできていると思ったが、こっちの方が更に出来がいい。前のは首にだぼつきが見受けられたが、こっちは首にぴったりフィットしている。微妙なところですが眉の盛り上がりなんかこっちの方がいかにも生々しい。玄人目で見てもマスクらしい感じがない。フルフェイスというより、私らの作った本人の顔に合わせたパーツごとのマスクと同レベルですよ。悔しいがむしろこっちの方が良くできていそうだ。２つは、別物ですよ」
「そうですか・・・、違うんですかあー・・・・・」
衣川刑事はいかにもまいったという風に頭を掻いた。
「こりゃあー・・、ゴリラみたいな凶暴な殺人鬼が２人もいるってことになっちまう・・」
刑事は的違いだが恨めしそうな目で菅原を見た。
「しかしそうなるとますますあなたの関係の人間が怪しくなってしまいますなあ」
「そいつは困りましたね」
菅原も顔をしかめたが、仕方ない。
「でも犯人の顔は分かっているじゃないですか？　わたしもニュー

スで見ましたが、あの顔は、わたしの知り合いにはいませんよ？」
「そうですか。ま、あれだけはっきり映ってますからね、素性が割れるのは時間の問題ですが・・・・、まさかね・・・・」
「なんです？」
何か含みのある刑事の顔に菅原は訊いた。刑事は自分で馬鹿らしいと思いながら言った。
「あの男の顔が変相、なんてことはないですかね？」
「はあ？」
菅原は一瞬呆れたが、いや待てよと思い直した。
「そっちの映像は見られますか？」
「はいはい」
刑事はすっかり愛用のノートパソコンを操作してキャバクラのビルに入る男の映像を出した。動画で、ほぼ正面、浅い角度で上から見下ろす全身が映っていて、男はドアを入ると、右手のキャバクラの入り口へ折れて消えていく。
もう一度再生して、ちょうど斜めを向いたところで一時停止した。顔を四角で囲って、拡大する。粗いモザイクが再処理されて詳細に男の顔を映し出す。
強面で、目がギョロッと大きく鋭く、なんだかキングコブラでも連想させる顔つきをしているが、見る女によっては渋いいい男に見えるかも知れない。
菅原はじっくり見て、うーん・・と唸った。
「どこもいじったようには見えないなあ・・・」
熱心に見る菅原に刑事は面白そうに笑って言った。
「いやそれはよかった。まさかこの顔までお面だったら捜査は大混乱だ。ところで、
お忙しいようですが、今日はいやに熱心ですなあ？」
大きな倉庫の一角の簡単な応接間で対応してもらっているが、あちこちでスタッフたちは忙しそうに怪しげな物たちを作り、出来上がった宇宙人だかモンスターだかの顔や胴や手足が棚に数十体分も

きれいに並べられている。
「ああ：」
菅原は照れたように笑い、刑事を盗み見るようにして訊いた。
「刑事さん、うちの連中にマスター・パピーのことを訊いたんですって？」
若い稲村刑事も呆れたように衣川刑事を見た。衣川刑事はなんだよう？というように相棒を睨んで、笑って言った。
「いやまあ、我々はあらゆる可能性を考慮してですなあー、おっほん。ま、一応、ですよ」
「そうですか？」
菅原は疑うようにして、言った。
「催眠術師と聞いて、リッキーの事件で、ちょっと思いついたことがあるんですよ」
「ほお、なんです？」
立て続けの凶悪凶暴事件に刀脇力丸の事件はすっかり参考案件程度になってしまっていたが、衣川刑事は興味深そうに菅原に話を求めた。菅原も思いきったように自分の意見を述べた。
「リッキーは、メイクをされている間に、自己暗示をかけてしまっていたんじゃないかと思うんです」
「自己暗示ですか？　どういうことです？」
「あの特殊メイクには４時間も掛かっているんです。それでも我々としてはかなり手際よくやったつもりですがね。リッキーには朝４時にスタジオ入りしてもらって、まず胸の筋肉を装着してもらって、椅子に座って、３時間、顔のパーツ付けをさせてもらいました。顔に掛かったら、おしゃべりもできません。ひたすらじっとしていてもらって、完成を待ってもらうしかありません。
ここで、想像してみてください。
３時間掛けて、徐々に自分の顔がモンスターに『変身』していくんです、
なんだか本当に自分がモンスターに変身していくような気になり

ませんか？」
　菅原はリアクションを期待して刑事たちを見た。
「まあ、そうでしょうかな？」
　刑事たちのリアクションは期待したほどではなかったが、菅原は更に持論を述べた。
「俳優には客観的に自分の演技を眺めながら演技する技巧派と、完全に役になりきって演技する没入派といると思うんですが、リッキーは完全に後者の役者だ。正直彼は器用な演技上手じゃない、なり切れなり切れと自分を追い込んで演技しているんじゃないでしょうか？　そういう彼が・・・、リッキーは前日は何をしてたんです？」
「2時間物のサスペンスドラマの撮影で福岡に行っていて、自宅マンションに帰宅したのは深夜1時過ぎだったそうだ」
「それじゃあ3時間もない、ほとんど寝てなかったんじゃないですか？　そんな状態で、なり切れなり切れと自分を役に追い込み、実際鏡で自分が変身していく様子を見ていたら・・、きっとリッキーは我々にメイクされながらそれを利用して役になりきろうとしていたんでしょう、だんだんと演技と現実とごっちゃになっていったんじゃないですか？」
「それが自己暗示ですか？」
「ええ」
　なるほどと刑事は頷いた。
「取り調べで刀脇は本当に人を殺すほど自分を見失うようなことはないと力説していましたがね、なるほど、そういうことですとやはり演技に熱中するあまり現実を見失ってしまったということになりそうですな」
「ええ・・・。かわいそうに」
「なるほど、分かりました。これは貴重なご意見を、ありがとうございました」
　刑事たちはいとまの挨拶をし、衣川は腰を浮かせて、菅原の顔を上目遣いで見ると、訊いた。

「ところで、菅原さんはマスター・パピーと会ったことは？」
菅原も半腰で間が悪そうに言った。
「いえ、会ったことはありません」
「そうですか」
衣川刑事はニッコリ笑った。

11　バイオレンス

さあ、いよいよ君の番だ！
待たせてしまったね？ウズウズしていただろう？
いいぜ、
思いっきり、ぶちかましてやれ！
もう我慢なんかしなくっていいよ、
君の怒りゲージはとっくにメーターが振り切れてる。
スペシャルだ！
思いっきりぶちかまして、

目に物見せてやれ。

君のことはよおく分かっているよ。
ステージは、整えておいたよ。
さあ、
最高得点を叩き出せ！
奴らを、
ぶっ潰せ！

車を運転しながら稲村刑事は衣川刑事に訊いた。
「キヌさん、まだマスター・パピーなんて追ってるんですか？　まるで人形みたいに刀脇やマスクの男たちを操って殺人を犯させている、なんて、そりゃマンガでしょう？」
後輩の馬鹿にした口調に、衣川刑事はいやに冷めた目で言った。

「おまえ、板、割れるか？」
「は？　イタ？　なんですか？」
「空手だよ。キエーッ、バキンッ、って突きや蹴りで板割るだろう？　やれるか？」
「板ってねー、ベニヤ板ならやれるかな？」
「阿呆。じゃ瓦は？　瓦なら何枚割れる自信がある？」
「２・・・３・・・枚？くらいはー、割れるのか、な？」
「１０枚」
「へえ？　キヌさん空手やってたんですか？」
「してねえよ。１０枚、素人に瓦を割らせたそうだ」
「誰が？」
「マスター・パピーがだよ。およそ２０年前、浅草の演芸場に出演していたとき、そういう催眠術ショーをやっていたそうだ。その場で客の中から希望者を舞台に上げて、催眠術を掛けて、たちまち空手の達人に変身させて、瓦割りや板割りをやらせて、瓦を１０枚叩き割って、ベニヤなんかじゃねえふつうの厚い板を叩き割らせたそうだ」
「本当ですかあ？　嘘臭いなあー。きっとその瓦や板に細工がしてあったんですよ。手品ですよ」
「そう言って勝手に舞台に上がって試した客が拳を砕く大けがをしたってよ」
「へえ～～・・・・・、本当ですかねえ？」
「マネージャーの清水がうっかり口を滑らせただろう？益口は催眠術の天才だって。そりゃどうも、本当らしいぞ？」
　赤信号に捕まってブレーキを踏んだ稲村は仏頂面で黙り込み、青信号で車を発進させると、言った。
「本気で思ってるんですか？　益口、マスター・パピーが催眠術で人を殺させているって？」
　衣川はまじめな顔で言った。
「俺はそう思っている。ただな、」

こちらも面白くなさそうに眉を険しくして言った。
「奴が言っていたとおり専門家に訊いてもそれは絶対不可能だそうだ。まともな社会常識を持っている人間なら、絶対にブレーキが掛かるってな」
「ブレーキなら完全にぶっ壊れてるじゃないですか？　あんなひどい殺し方は、まともな神経じゃできませんよ」
「刀脇はまともだ。壊れちゃいねえ。だから分からねえんだ。後の2人は、ぶっ壊れているんだろうぜ、まともな人間としてのブレーキがよ。だから可能だろうが、刀脇は駄目だ。まともな人間には、催眠術で人を殺させることは出来ねえ。だからわっからねんだ」
「もし本当に益口が催眠術を掛けたのなら、何かの錯覚を起こさせたんじゃないですか？　推理小説なんかでありそうですがねえ？」
「うーー……ん……」
衣川は背もたれにふんぞり返り、稲村は横目に見ながら言った。
「ま、一人は捕まりますよ。そうすれば催眠術のカラクリも分かるでしょうよ」
「……どうやったのかなあー……」
後輩刑事の言葉など耳に入らないように衣川刑事は考え込んでいた。

三角ビル、キャバクラ店の事件から3日後の、土曜夜、所は東京都内でも「市」のごくふつうの住宅街。
車道に面するコンビニの駐車場に4人の若者がたむろしていた。11時になろうというのに平気で学生服を着て座り込んでいる。体の大きい奴らばかりで高校生に見えるが、中にはツルンとしたまだ子供っぽい顔の奴もいる。
大声こそ出さないが、人が表を通ると威嚇するようにふてぶてしい笑いを浮かべた顔を向け、通行人は目を合わせないようにそそくさと通り過ぎた。

ケッ、世の中なんてくっだらねえ。
そう、社会を舐めきった顔をしていた。
そこへ、黒いウインドブレーカーのフードを目深にかぶった小柄な男が歩道を歩いてきて、コンビニの入り口向かって駐車場を斜めに入ってきた。
両手をポケットに突っ込んでいる。
４人の不良学生たちはうつむいて顔を見せないように歩いてくる男を面白そうに馬鹿にした笑いを浮かべて見ていた。
男は４人の横を、入り口前に立った。自動ドアが開き、若い男性店員が「いらっしゃいませ、こんばんは」と挨拶した。
ウインドブレーカーの男は開いたドアを前にそのまま突っ立っていた。
なんだ？と店員も不良学生どもも思って男を見た。
男は、ポケットからやたらと毛深い大きな手を出すと、フードを背に降ろした。
あっ！、とその顔を見て皆思った。
男は眉の盛り上がった、やたらと太い鼻の、人間離れした顔をしていた。
これが、もしや、ニュースで言っていたモンスターのマスクをかぶった凶悪殺人犯？！
店内の店員とレジに並ぼうとした男性の客がギクッと立ちすくみ、
４人の不良学生たちは『おい？』と顔を見合わせた。
ふてぶてしく、『やっちまおうぜ？』と。
相手は顔と手はやたら大きいが、背は自分たちより１０センチも低かった。
４人は立ち上がり、先頭になった一番強そうな奴が声を掛けた。
「おいおい、てめえか？　美人のＯＬの姉ちゃんとキャバクラのお姉ちゃんたちをぶっ殺した殺人鬼っていうのはよお？　ちきしょー、羨ましいひでーことしやがってえー。てめーみてーな極悪人、９割くらいぶっ殺しちまっても世のため人のためだよなー？」

完全に舐めきった口をきいて、仲間と笑い合った。
「だよなー、極悪殺人鬼をやっつけたら、俺たちヒーローだよなあー？」
「警視総監賞？もらえちゃう～？」
「ボクたち、名誉市民」
「ギャハハハハハ」
全員小柄な殺人鬼を完全に馬鹿にしきっていた。
モンスターマスクはまっすぐ店内を見たままで、先頭の男はチッと舌打ちして手を伸ばした。
「おいこらテメー、なにシカトぶっこいてんだよおー」
肩を掴もうとした男の手を、モンスターの手が手首を掴んだ。掴まれた不良の方は「ウホ？」と面白がった。
筋肉のモンスターが不良を見た。
手首を掴んだ大きな手が、グッと引かれた。

ブチイッ。

血しぶきが噴き出した。
「うわっぎゃあああああああっ！！！！」
不良は自分の身に起こったことが信じられず、大口を開けてわめき、あわあわと後退して、
「うわあぎゃあああああああっ！！！？？？？」
と物凄く、叫んだ。
「ひっ、」
「なんだ？」
「うそ・・・・」
他の3人はショックにざっと顔を青くしながら、それでもまるで眼前の光景が信じられず、

店内の人間たちは、
「ぎゃああっ！！」
と恐怖の悲鳴を上げた。
モンスターは、肩から引っこ抜かれた不良の裸の腕を手にぶら下げ、ボタボタボタと大量の血を滴らせていた。
「う、うわ、お、俺の、腕」
思い切り顔を歪めて呆然とした目で自分のもぎ取られた腕を見る不良に対し、
モンスターはその腕をコンビニの店内に投げ捨てた。中からぎゃああと悲鳴が上がる。
「俺の腕！」
追いかけて店内に飛び込もうとする不良とすれ違い、モンスターは残りの3人に向かってきた。
「うわああっ」
3人は一目散に逃げ出した。
モンスターは遅れた1人の背に蹴り掛かり、
「ゲッ」と前のめりになった背にそのまま駈け登り、思い切り顔を蹴った。
蹴られた不良はバウンドして後ろに吹っ飛んだ。
恐ろしく跳躍した小柄のモンスターは、
2番目の不良の首を振り下ろした手で殴りつけるように掴み、飛び降りた勢いでアスファルトの床に「ガリッ」と掴んだ不良の顔を撫でつけ、そのまま振りかぶると、歩道を振り返り慌てた顔で逃げていく3人目の背中に恐るべき怪力で投げつけ、命中させた。投げるときに「ボキッ」という音が響いたから、投げられた男の首は折れているだろう。その頭に背中を直撃されて、3人目も前にドッと倒れた。
「うおおおっ！」
モンスターは雄叫びを上げ、走り、必死に這いずって起き上がった不良の背中に無情に跳び蹴りを喰らわせた。

「ぎゃっ」と不良は前に飛ばされ、ガツンと顔面をアスファルトに強打した。
モンスターは少し戻って投げ飛ばした不良の腹を蹴り上げたが、無反応で、やはり既に死んでいた。
ボタボタと鼻血を垂らす顔を上げて、生き残りの不良は必死に前に這いずって逃げようとしたが、
「ぎゃっ」
その背中を思い切り踏んづけられた。ぐぐっと踏み込まれて胸骨がミシッと鳴った。「うぎゃああっ」と不良は涙を流しながら悲鳴を上げた。
踏みつけるモンスターは、ようやく気が済んだのか足を外して前に歩いていったが、ゴトリと、重い音をさせて何か掴み上げた。
息も絶え絶えの不良は、それを見て恐怖で目を剥いた。
モンスターはバス停の標識を持って不良の頭の所に戻ってきた。不良の目にはその底部の重いコンクリートの重りがぐんぐん近づいてきて恐怖心を爆発的に煽った。
「や、やめて‥‥、お願い‥‥」
不良はか弱い女の子のような声で哀願した。しかし、
モンスターは無情にその頭上高々、標識を持ち上げた。それを落とされたら‥、不良の頭は木っ端みじんに潰れるだろう。

12　現行犯・・・

「待てえーーっ！！」
強い意志のある男性の声が怒鳴りつけた。
警官だ。2人。彼らはモンスターの通報を受ける以前にコンビニ前でたむろしている中学生たちの補導に来たのだが。
警察官たちは向こうの方から駈けてきて、現場の異常な状況に驚きながらも職業的な正義感をしっかり持って「犯人」を険しい目で確認した。先の一人が5メートルの距離で立ち止まり、手で後ろを制した。犯人は重い凶器を振り上げて被害者にとどめを刺そうとしている。そして、犯人は、手配の回っているあのモンスターマスクだ。
警官は、ホルダーから拳銃を抜いた。安全装置を外し、構える。
「後ろに下がりなさい！　それを、下に置きなさい！」
じっと構え、犯人が動こうとしないのを見ると、その頭上、高い角度で威嚇のため1発撃った。
「パンッ」と乾いた音が夜の住宅街に響いた。
警官は改めて犯人に銃を向けた。
「下がりなさい！　下がらないと、撃つぞ！」
後ろの警官も銃を構えた。彼らはじっと緊張して、犯人の出方を見つめた。
犯人は、標識を後ろに下げると、ブンと勢い良く警官たち目掛けて投げつけた。
ゴッと物凄いスピードで飛んできた重い槍を「わっ」とよけて、警官たちは犯人を確認し、突進してくる犯人に、
「わっ」
パンッ、パンッ。
思わず2人とも発砲した。
1発は外れ、1発は腹に命中した。そのまま飛びかかってきたモ

ンスターに
「うわあっ」
パンッ、パンッ、パンッ。
警官は我を忘れて連射した。弾は、３発とも犯人の胸に命中した。
犯人は撃たれた勢いに押されて立ち止まり、どおっと後ろに倒れた。
「ハアッ……、ハアッ……」
撃った警官は固まった手に拳銃を構えたまま、足で犯人の足を蹴った。動かない。
殺して……しまった……。
仰向けの背中の下に、真っ黒く、犯人の血が広がっていった。
おい、ともう一人がまだ銃を構える警官の腕を押さえ、
「終わった。署に連絡を」
撃った警官は無言ながら頷き、銃を納めると、無線機で署に状況を報告した。そうしている間に今度はモンスターの通報を受けてけたたましくサイレンを鳴らしながらパトカー３台が走ってきた。

直ちに現場が封鎖され、被害者たちが保護された。
腕をもぎ取られた少年はコンビニの中で倒れ、大量出血のショックで意識を失い激しく痙攣を繰り返していた。その胸には、自分のもぎ取られた血まみれの右腕をしっかり抱いていた。
背中を蹴られてジャンプの踏み台にされた少年は地面に後頭部を強打して昏睡状態になっている。
槍として投げられた少年は首を骨折して死亡を確認。
あわや頭を潰されずに助かった少年は、痛そうに血の混じった咳をし、ガタガタ震えながらも意識を保っていた。
撃たれた犯人は、手のモンスターグローブをめくって脈を調べ、顔のモンスターマスクの首をめくって脈を調べ、完全に死亡していることを確認された。
写真が撮られ、鑑識官によって慎重にマスクが外された。

現れた顔を見て刑事たちはギョッとした。
「こいつは・・・・・」
顔を思い切りしかめる。
「子供じゃねえか・・・・・・」
現れた、恐ろしいマスクには似つかわしくない幼い小柄な顔は、どう見てもまだ中学生程度の子供だった。
刑事は考え、救急車に乗せられようとしている生き残りの少年を呼んだ。救急隊が異議を唱えたが、ほんのちょっとだと刑事は、中学生に犯人の顔を見せた。
「どうだ？　知ってる奴じゃないか？」
白い小さな顔を見て、中学生はブルッと震えた。
「そんな・・・、まさか・・・、そんな馬鹿な・・・・・・」
「知ってるんだな？　誰だ？」
刑事の脅すような問いに、中学生はガクンと頷きながら、言った。
「ク、クラスメートです。○○中学2年の・・、栗林・素雄です・・・・・・・」
呆然とする中学生に刑事は「そうかよ」と言い、救急隊員にどうもと中学生を返した。
サイレンを鳴らして救急車は走り去った。
「○○中学校2年のクリバヤシモトオ。自宅を押さえるぞ」
おう、と刑事たちは忙しく動いた。

翌朝の新聞テレビはこの事件の報道一色となった。
この聞くも凶暴な事件の、犯人と被害者が同じ中学校の同じ学年、クラスの同級生同士で、
被害者は1人が死亡、2人が瀕死の重体、1人が重傷で、犯人は射殺。
中学生を射殺するという異常事態に、発砲した警官の対応に問題はなかったか？、厳しい目が向けられた。

それと、
死んだ犯人の少年は前の3件の殺人事件の犯人と同一人なのか？
公開されていた犯人とおぼしい男と少年とでは顔がまるで違っていた。
しかし同じモンスターマスクをかぶっていたこと、ふつうでは考えられない犯行の凶暴ぶりから、前の事件との関連は疑われた。果たして少年の捜査は一連の事件の解決につながるのか？　世間は固唾をのんでその進展を見守った。

昼間、菅原・スカー・一馬はスカーレッド第2スタジオにまたも衣川刑事の訪問を受けた。
「たびたびどうも。今度は、これなんですがね」
と、今度は写真で、顔と手のマスクのセットを外して格部位を詳細に写した物と装着して血に汚れた生々しい物と１０数枚見せられた。
「どうですか？」
じっくり見て菅原は言った。
「これも別ですね。形状やペイントが微妙に違う。顔に大きさが合っていないせいもあるだろうけど、これが一番出来が悪いかなあー・・・」
「違いますかあ」
刑事はまいったというように頭を掻いた。
「そんなに悪い？」
「いや、悪くはないです。あくまで比べてみた場合の感想で。これもプロの仕事ですよ」
それを聞いて刑事はニンマリした。
「それじゃあ、現物を見たら誰が作った物か分かりますか？」
刑事の期待する目に見つめられ、菅原は思いっきり渋い顔で言った。

「いや、それは‥、無理ですよ。‥‥でも、一つ確かめられることがあるじゃないですか？」
「なんです？」
「このマスクがリッキーのライフマスクから採られた物かどうかですよ」
「あっ、」
刑事は思わず手を打った。
「そうか。それで範囲はグッと絞れる！」
「わたしとしては是非広がってほしいですがねえ」
渋い顔の菅原に刑事はまじめな顔を作って、
「ご心配なく。我々は予断なく客観的事実のみを正確に調べますから」
と言った。
「刀脇のライフマスク、お貸し願えますか？」
「ええ。どうせもう使うこともないでしょうし」
菅原はスタッフの作業する合間を縫ってスタジオの一角へ刑事を案内した。
「最初は気味悪いと思いましたが、こうしてだんだん出来上がっていくのを見ていると楽しいものですなあ」
手がかりの得られそうな刑事は上機嫌でニコニコ言った。
「是非映画を見てください。公開は再来年ですがね」
作業場から離れた棚で、段ボール箱を引っぱり出して菅原は中を調べた。
「‥‥えっと、ここに入っているはずなんだが‥‥」
菅原は2つ3つ引っぱり出して調べ、
「おかしいな‥」
とつぶやくと、作業しているスタッフに向かって、
「おー‥い、おおーい！、誰か、リッキーのライフマスク知らないかあ？」
と作業中のスタッフを驚かせないように最初は小さく、後は大声

で皆に訊いた。顔を上げる者、無視して作業を続ける者、まちまちだったが、返事をする者はいなかった。
「おおーい！、井上ー！　おまえ知らないか？」
敵の巨大なボスの「触手」をペイントして、まったく無視の井上は「おおーい！」と再三言われてようやくうるさそうに返事した。
「知りませんよ」
とだけ言ってまたエアブラシの細かい作業に没頭した。菅原はしょうがなく刑事に肩をすくめて見せ、もう一人、松浦を捜した。
「松浦いないか？」
近くの女性スタッフが言った。
「マッツンならまたザンバさんとこ行きましたよ。さっき出ていきました」
「おっ、そうか。・・・・すみません、刑事さん。あの、マスク、警察で押収してないですよね？」
「してないですよ」
「ですよねえ・・。すみません、今はちょっと見つからないようです。ご覧の通り今は特に次から次に新しい物が増えていってる状態で、要らない物は処分しちゃってるんですよ。リッキーのマスクは貴重だから捨てたりしないはずなんですが・・・・。すみません、捜しておきますんで、今のところは・・」
「そうですか・・・・」
せっかくの手がかりが得られず、衣川刑事はがっかりした。
「それじゃ、ま、見つかったら是非お知らせください」
「すみません」
肩を落として出口に向かう衣川刑事は、振り返り、言った。
「本当に、あのマスクを作ったのが誰か、分かりませんか？」
菅原は
「分かりません」
と答えた。

13　ゲーム催眠

栗林素雄の犯行動機は容易に推測できた。
彼は被害者４人のグループに日常的にイジメを受けていた。学校側はいろいろ言い訳をしたが、生徒たちの間ではそれは周知の事実だった。
栗林の家の自室からはいろいろな物が押収されたが、その中に、ＰＬＡＹＢＡＳＥ３のゲーム機とそのソフト数枚があった。
こうした場合にすぐ問題となる暴力的なゲームソフトだが、素雄は根っから大人しい子供だったようで、パズルゲームが多く、数点のＲＰＧもマンガ的なキャラクターのふつうの冒険物だった。
ただ一点、
押収されたＰＬＡＹＢＡＳＥ３の中に、印刷のないディスクが収まっていた。
そのディスクのパッケージは部屋のどこからも見つからなかった。
実際にスタートしてみると、それは、市場には出回っていないはずの
「スーパーウルフマン」
だった。

制作会社の、今は修整作業に殺気立っているＳＵＮＢＲＡＩＮに持ち込んで調べてもらったところ、それは改修前のオリジナル版のコピーだった。
しかも、ＳＵＮＢＲＡＩＮのスタッフは認めたがらなかったが、製品版には海賊版対策に厳重なコピー防止プログラムが組み込まれている。しかしそのコピーにはそれが入っていなかった。つまり、そのコピーの出所は、開発中のスタッフのコンピューターからということだ。
ＳＵＮＢＲＡＩＮでもその犯人捜しが行われた。

スタッフの中に栗林素雄の親戚や知り合いはいなかった。
金目当てで売ったのか？
しかし開発スタッフの給料はいい。外部にデータを漏らすことは重大な契約違反で、多額の賠償金を支払わなければならない契約があった。犯罪として割に合わない。
では、
何らかの思想的な動機か？

一人、
疑われる人物がいた。
バイオレンスシーンの改修にもっとも頑強に反対していた人物、
モンスターデザイン担当の、
磯坪　鬼仁郎（いそつぼ　おにじろう）
３４歳、だった。

彼が、自分の手塩に掛けたバイオレンスシーンがお蔵入りするのを嫌って敢えて外に流出させたのではないか？

磯坪はその疑惑を「フンッ」と鼻息で蹴散らして言った。磯坪は牛のようにまるまる太っている。
「馬鹿じゃねえか？　そんなことするわけねえだろ？　ベスト版出すときにディレクターカット版として復活させるんだろ？　今めんどくせえモザイク掛けしてんのによお、誰が自分の財産ばらまくかよ？」
バイオレンスシーンの修整はモザイクを掛けるわけでなく基本的に全部作り直しているのだが、「わざわざ見せないようにする」という意味だろう、磯坪はそう言った。
「それではですね」
と刑事はこの醜怪で不愉快な人物相手にひくつく額の青筋を抑えながら尋ねた。

「オリジナルのデータが外へ出たことはないですか？　別に漏洩的なことじゃなくとも、何か事故とか、必要があってとか」
俺は知らねえと言う磯坪に対し、他のスタッフに同じ質問をしてみたところ、プロデューサーが「ありますよ」と答えた。
「リッキー、刀脇力丸さんに貸しました。あのＣＭを引き受けてもらうときに。まだ製品版が完成していなくて、とりあえず制作中のデータからＤＶＤ－ＲＯＭにして。お好きなようで興味を持たれたようなのでじゃあ一晩だけという約束で、事務所からご自宅に持って帰られて、翌日、返してもらって、ＣＭ出演を快諾してもらいました」
「それはいつのことです？」
「撮影の、２ヶ月ほど前です。あのＣＭはもっとインパクトのある宣伝をしようと、後からＳＵＭＭＹに予算を出してもらって第２弾ＣＭとして決まった物ですからね、けっこうギリギリのスケジュールでしたよ」
「正確な日付は分かりますか？」
「ええ。待ってください」

日時を得て、刑事＝衣川と稲村はマンションに自宅謹慎中の刀脇力丸を訪ねた。
刀脇は、事件から３週間、すっかり面やつれして気弱な顔をしていた。
「スーパーウルフマン」のゲームソフトのことを訊かれて、刀脇はあまり思い出したくなさそうにしながらも誠実に答えた。
「ええ。僕もわりと好きな方なんで、すげえなあって感心しながら面白くプレーしましたよ」
「どれくらい？」
「３時間くらい…やったかなあ？　最初のシナリオの、中ボスをやっつけたところで、夜も遅くなってしまったんで切り上げました」
「あなたそれのコピーを取りませんでした？」

「いえ。できないんでしょう？セキュリティーが掛かっていて？」
「いや、あのディスクは簡単なコード入力でコピーが出来たそうです」
「暗号入りじゃあ僕にできっこないですよ。そんなの探るような知識は僕にはないです」
「なるほど。では他にあのゲームを遊んだ人は？」
「……いや……。実は…、あの時彼女が遊びに来ていて……」
「ああ、」
　噂の…、と若い稲村は思った。刀脇は続ける。
「怒られたんですよ、いつまで子供みたいにゲームなんかで遊んでいるのよ、って。それをうるさいなあって言いながら僕はプレーしてたんですが、ま、切りのいいところで切り上げたわけで」
「彼女さんはそういうことには？」
「まったく駄目です」
「他に誰か？」
「いえ。彼女だけです」
「ディスクは翌日あちらさんに返したそうですが、その間誰かがそれに接触したと言うことは？」
「いやあ……。午後の仕事の前に事務所に寄って、プロデューサーさんにお渡しして…。カバンの中に入れて、ソファーの所に置いておいたと思いますが、事務所のスタッフが４人ほどいましたが、誰も触っていないと思います」
「なるほど。そうですか……」
　収穫なし。しかし衣川刑事は最後に訊いた。
「刀脇さん、その後マスター・パピーとは？」
「は？　……ああ、マスター・パピーさん…。いえ、会ってませんが……？」
　怪訝な顔をした刀脇だが、あっ、と何か思いだした顔をした。
「何か？」
「あ、いや、前日ですよ、いえ、テレビの収録を終わって話がある

と言うんで事務所に寄ってＣＭのお話を伺ったんですが、そのテレビの収録でマスター・パピーさんとご一緒したんです。僕、マスターさんに失礼なことをしてしまって、後で楽屋にお詫びに行ったんですよ。マスターさんは笑って許してくれましたが・・・、マスター・パピーさんが、どうかしたんですか？」
衣川刑事は刀脇の質問には答えず、ただ
「そうですか」
と満足そうにニンマリした。

衣川刑事はマスター・パピー催眠説を疑っていた。
稲村刑事は懐疑的で呆れていたが、衣川刑事は若手を一人呼んで、
「おい、おまえこれやってみろ」
とテレビにつないだＰＢ３を指して言った。
「なんすか？　押収したエロゲームっすか？」
「阿呆。おまえらみんな中学生か。いいから、やってみろ」
「へーい」
若手刑事は長椅子に腰掛けてゲーム機のパワーボタンを押した。
「おっ、これは噂の『スーパーウルフマン』じゃないっすか！」
「好きかよ、こういうの？」
「えっへへへ、実はやってみたかったんすよねー」
「デカにゲームで遊んでる暇なんてあるかよ。阿呆が、ありがたく遊びやがれ」
「はいは～い」
若手刑事はオープニングのＣＧムービーを見て「すげーすげー」と大喜びした。これはＳＵＮＢＲＡＩＮから無理を言って借りてきたオリジナルの「スーパーウルフマン」だ。ムービーは、これがテレビＣＭのオリジナルなのだろう、半分モンスターの主人公が武装警官を投げ飛ばし、更に別の警官の脳天を両手で殴り降ろし、「うおおおっ」と吠えてスーパーウルフマンに変身したところでタイト

ルが出て終わった。
セーブ用のファイルを作って、ゲーム本編が始まった。
若手刑事がプレーするのを衣川と稲村はじっと観察していた。
喜々としてプレーしていた若手は不安になって先輩たちに訊いた。
もう1時間以上プレーを続けている。
「あのー…、これ、いつまで続けるんすか？」
「面白いか？」
「そりゃあもう」
「じゃあ遠慮しねえで続けろよ」
「はあ…」
若手はいいのかなあと思いつつ、ゲーム内の時間が進み、夜のバトルアクションが始まり、興奮気味にコントローラーを操った。
「キヌさん」
稲村が衣川に言った。
「これが原因だと本気で思ってるんですか？」
「さあな」
「まさかこれをやっているうちにゲームのキャラクターに同化して自分も凶暴なモンスターに変貌してしまうなんてこと、起こりゃせんでしょう？」
「さあな」
「えっ？　な、なんすか？モンスターに変身って？」
「面白いか？」
「はい…」
「じゃあ続けろよ」
「はあ……」
テレビの中で「スーパー」に変身したウルフマンがマシンガンの銃弾もなんのその、敵をぶん殴り、ぶん投げ、叩きつけ、ガラスを砕き、壁に穴を開け、大暴れしている。驚いたことにこの「リアルな」ゲームはウルフマンと敵の戦闘が始まると、周りにいる一般人

までとばっちりを受けて「死亡」するのだ。
「あっ、くそ」
画面の光を目に映して、若手は忌々しそうに乱暴にコントローラーをガチャガチャやった。
「すんげえパワーだけどコントロールが無茶苦茶だなあ・・・、くそっ」
スーパーウルフマンに変身すると無敵だが、まるで言うことを聞かなくなってしまうのだ。
夢中になっている若手をじっと衣川は見続けた。
「くそっ、ああ、ちきしょお」
どうもこのゲームが青少年の精神に悪いのだけは確かなようだなと思いながら。

１４　逆行催眠

刀脇力丸のライフマスクは結局見つからず、新たなライフマスクを作ることになった。まさか本人に死亡した犯人が被っていた物を付けさせるわけにはいかないので。

菅原のスカーレッドは忙しくてそれどころじゃないので別の特殊メイクの工房に頼んで作ってもらった。

工房にやってきた刀脇は複雑な表情で「顔取り」をされていた。

「ご苦労様でした」

と、どんなものなのか2時間も付き合って見学させてもらった衣川刑事は外側を固い素材で固めた「型」を取り払われた刀脇に言った。頭の型も取るので刀脇は髪をびっちりオールバックにして、ずっと諸肌ぬいで椅子に半身を直立した状態でいた。

洗顔してタオルで拭いてさっぱりした刀脇に、衣川刑事は言った。

「もう一つ、ご相談と言いますか、お願いがありましてね」

「なんです？　この際です、僕でお役に立つならなんでも言ってください」

「そりゃ助かります。実はですねえ、あなたに、催眠術を受けてもらいたいと思いましてね」

刀脇はさすがにギクッとした。

「催眠術・・・ですか？・・・・」

「まあ、無理にとは言えないですがねえ」

「それは、捜査のお役に立つんですか？」

「上手くいけばね、あなたが何故あんなことをしてしまったのか、カラクリが掴めるかも知れない」

「カラクリ・・・・・」

刀脇は何か含みのありそうな刑事の顔をじっと見た。

「いいでしょう、受けましょう。それで・・・、原因が分かるなら・・・・」

「ありがとうございます。危険のないよう専門家の下で十分注意して行いますので」
「はい。よろしくお願いします」

ということで、
刀脇力丸は大学の研究室で教授の監督の下、専門の医師によって催眠術が掛けられることになった。
ベッドに寝かされ、カーテンを閉めて薄暗くなったところで、医師はペンライトの小さな光を見せて刀脇に話しかけた。
「リラックスして。危険なことはなにもありません。ここは安全な場所で、我々は皆、あなたの味方です」
部屋には、教授と、医師と、助手の男性看護士と、衣川稲村の両刑事と、刀脇と、6人がいる。
「リラックスして、光を目で追ってください。なにも考えず、この一点だけに集中してください」
ユラリユラリと、医師は微妙な動きを光に与え、
「リラックスして‥‥、集中して‥‥、リラックスして‥‥、集中して‥‥」
同じ言葉を囁き続けた。弛緩と、緊張、弛緩と、緊張‥‥。やがて、刀脇の目がとろんとしてきた。光を追う目が遅れだし、やがて、動かなくなった。
「目を閉じていいですよ。体と頭は眠っています。眠っていますが、意識は、わたしの声を聞いています。聞こえていますね？」
刀脇は目を閉じ、ゆっくり、頷いた。
医師が静かな声で言った。
「催眠状態に入りました。これから時を遡らせます」
いいですね？と目で訊かれ、衣川は頷いた。
「刀脇さん。あなたはこれから時間を逆行していきます。危険はありません。ただ記憶を遡って行くだけです。記憶を見ているあなたは、ちゃんとここにいます。さあ、まず昨日に戻ってみましょう。

２４時間前です、あなたは、今、どこにいますか？」
刀脇の口がゆっくり動いた。
「暗い・・・」
「どこにいるか、分かりますか？」
「スタジオ・・・」
衣川は医師に頷いた。刀脇は昨日工房でライフマスクを採り、今その型の中でラバーの固まるのを待っているのだ。医師は頷き、言う。
「いいですよ。刀脇さん、それでは次は3日前に戻ってみましょう。午後3時です。あなたはどこにいますか？」
「マンションの、部屋」
「あなたと、他に誰かいますか？」
「いない、僕、一人・・」
「けっこうですよお。それでは更に1週間前に戻ってみましょう。時計は午後3時です。あなたは、どこにいますか？」
「マンションの、部屋」
「何をしていますか？」
「何も・・、何も、することがない・・・」
「いいですよ。これはあなたの記憶です。過ぎ去った時の記録です。みんなあなたの味方です。わたしたちを信じてください。あなたは自分を責める必要はどこにもありませんよ。さあ、では今度はもっと、2週間前に戻ってみましょう」

催眠術を受ける刀脇を見ながら衣川は思った、
マスター・パピーは刀脇を自意識が強く他人の言葉を受け入れるような人間ではない、というようなことを言った。しかし今目を閉じて寝ている刀脇はとても素直に医師の言葉を受け入れている。
マスター・パピーの見立てが間違っていたのか、
敢えて嘘を言ったのか、
それとも事件のせいで刀脇の精神が弱くなったのか、

それとも、

それとも以前にも催眠術を掛けられて、催眠術を受け入れやすくなっているのか？

刀脇は事件を飛び越して前日に遡った。事件を起こした精神状態を思い起こさせるのは危険と判断して敢えて飛ばしたのだ。

医師は慎重に言葉を選び、話しかける。

「あなたはあなたがこれから起こす事件のことは何も知りません。あなたは、マスター・パピーという人を知っていますか？」

刀脇は頷いた。

「あなたがマスター・パピーと最後に会ったのはいつです？」

刀脇の眉がひくりと動き、眉間にしわが寄り、目蓋の下で目玉がぐりぐり動いた。頬が強張り、明らかな緊張が見て取れた。

医師が穏やかな口調で呼びかける。

「大丈夫ですよ。あなたは安全です。あなたは安全なところにいて、過去を見ているだけです。

わたしたちはあなたの味方です。

あなたの助けになるため、あなただけが知っている過去を見て、教えてください。

リラックスして、ゆっくり、思い出してください、

あなたがマスター・パピーと最後に会ったのは、いつです？」

医師の呼びかけに再びリラックスした刀脇は、ゆっくり、自分の記憶をたぐり寄せた。

「僕が最後にマスター・パピーに会ったのは……、

僕が最後に……マスター……パピー……………会ったのは…………

僕が………最後…………

マスター…………

パピー…………

マスター……
パピー……
マスター……
マスター……
マスター……
マス……」
刀脇の様子がおかしくなった。目玉がぐりぐり動いて、口を動かしながら歯を食いしばり、
「マス、タアア〜〜〜、」
と、口角をぐっと下げて、首筋を浮き上がらせ、
「マス、タアアア〜〜〜、パアアピイイイイ〜〜〜」
と、ついに顎を逸らして顔を揺すり、ぐあっと白目を剥いた。
その変貌ぶりに衣川も目を見張り、正直、恐怖を覚えた。

「マアアスウタアアアアアアア、パアアアアピイイイイイイイイイイイッ、
マアスウタアアアアア、
パアアアアピイイイイイイイ〜〜〜〜〜」

稲村も「ヒイ」と息を飲み、教授は「先生」と医師に中止を求めた。
「マアスウタアアアア〜〜」
「大丈夫ですよ、刀脇さん。あなたはそこにはいません。安全な場所からただ見ているだけです」
「マアスウタアア、パアピイイイ〜〜」
「大丈夫ですよ。さあ、戻りましょう。わたしの声を聞いてください？　あなたはわたしといっしょに安全なところにいるのです」
「マアスウタアアア〜」
「1、2、3、で手を鳴らしたら、あなたはここに帰ってきます。いいですね？　あなたは安全な場所にいるんです。ここに帰ってき

ましょう。行きますよ。1、2、3、はいっ」
パンッ、と医師は刀脇の耳元で手を打った。
「マス……」
刀脇がハッと目を開けた。
夢から醒めた目で、かがみ込む医師を見た。
「大丈夫ですよ、刀脇さん。催眠は覚めました。もうすっかり終わりました」
安心させるよう微笑む医師の顔を刀脇はじっと見つめた。
「大丈夫ですよ。起きますか？」
「バケモノ」
「なんですか？」
「化け物」
「刀脇さん？」
「化け物だあああっ！！！！！！！！！！」
「うわっ」
医師に掴みかかる刀脇を衣川と稲村は慌てて押さえた。
「刀脇さん、落ち着いてください！　刀脇さんっ！　自分を取り戻して！」
衣川は刀脇の顔をじっと見ていた。上唇をひく付かせて、歯を剥き、鼻の上にしわを寄せ、眉を怒らせたその顔は、まるで。
「うおおおおおおっ、うおおおおおおっ」
刀脇は野獣のように叫び、物凄い力で腕を振った。
「刀脇、うわあっ」
衣川はたまらず振り飛ばされ、
「くそっ」
暴れて、稲村が必死で押さえつけている刀脇を見て、何かないかと捜し、走ると、カーネーションの一輪挿しを掴み、中の水を刀脇の顔にぶっかけた。
「起きろおっ！　本番中に寝てる奴があるかあっ！！」
衣川は適当に思いついたことを大声で怒鳴ったが、「本番」の言

葉が効いたようで、刀脇はハッと暴れるのをやめた。ふうーー…と背中から両腕を羽交い締めにしていた稲村が力を抜いた。
「ひっでえ馬鹿力だったぜ。こっちの肩が外れるかと思った」
「僕は…、いったい……」
状況が分からずきょとんとする刀脇を、刑事2人は顔を見合わせ、専門家たちはまるで化け物を見るように恐い顔で見つめていた。
衣川は言った。
「決まりだな。奴は、黒だ」

15　犯罪の可能性

マスター・パピーの名に異常な反応を見せた刀脇だったが、具体的なところは何も分かっていない。しかしこれ以上は危険と判断し、教授は再度の催眠術を禁止した。衣川刑事としても残念ではあるが致し方ない。

稲村刑事と念のため看護士が刀脇を自宅マンションに送っていき、衣川刑事は2人の専門家に意見を聞いた。

専門家たちは意見を交換した。

「パニック症候群でしょうかねえ？」

「ええ。しかしあの異常な攻撃性は、外へ向かったもので、内に籠もる防御の姿勢ではない。単なる恐怖ばかりでああなったのではない。考えられるのは、恐怖の対象への同化願望でしょうか？」

「そうですね。徹底して自己を打ちのめされると、ああした反応を示すこともある。虐待を受けた子供が、親になって自分の子供を虐待してしまうのと同じメカニズムですな」

「もしそれがマスター・パピーの催眠術のせいだとしたら‥‥、それは催眠術ではなく、洗脳でしょう」

「そうでしょうねえ。しかし洗脳には時間が掛かります。人格の破壊を招くこともしばしばある。刀脇氏のように忙しく、常に人の目に晒されている人には難しいのではありませんか？」

「そうですね。彼の行動を調べてみなければ結論は出せないが、難しいように思いますねえ」

ちょっと待ってください、と衣川刑事が割り込んだ。

「洗脳というのは、どんな風にやるんです？」

「恐怖と、拷問です。洗脳とは、本来その人とは相容れない思想を

無理矢理受け入れさせることですから、その自我を破壊しなければならない。思想を受け入れることを強要し、繰り返し繰り返し、執拗に恐怖と苦痛を与えるのです。繰り返し繰り返し行うことで、次第に、その思想を受け入れない自分が悪いのだ、と思わせるようになるのです。その思想を受け入れることが正しいのだ、その思想を受け入れれば自分は幸せになれるのだ、と思わせるのです。戦争がそうであり、独裁的な専制政治がそうであり、過酷な取り調べによるえん罪の発生も同じメカニズムです。繰り返し無限に続くと思われる恐怖と苦痛、人の精神は自分を守るため、自分を曲げて、それを受け入れてしまうのです」

「ですから、逆に言えば、洗脳にはそれだけの時間と手間が掛かるということです。信頼関係によって成り立つ催眠術もそれなりの時間が必要だが、洗脳にはそれに倍する時間が必要ということです」

「なるほど」と衣川刑事は頷いた。

「催眠術はその人の隠れた願望を表に引き出す。だからその人が本心から望まないことは決してやらせることが出来ない、ですな？一方で洗脳は、その根本部分をぶっ壊してしまう、真逆の行為と言っていいですか？」

「まさにその通りです」と専門家たちは頷いた。

衣川刑事は唸って、訊く。

「マスター・パピーが、催眠術のスタイルでそれを行うことは、絶対に不可能ですか？」

これも専門家は一致した意見を出した。

「絶対に、不可能です」

衣川刑事は、うーーーん・・・、と唸った。

衣川刑事の執着する肝心のマスター・パピーはというと。

マスター・パピーこと益口寿夫には新米の刑事2人がずっと張り付いていた。
捜査陣で催眠術殺人の可能性を指示する者は1人もなく、それでも切れ者の衣川がうるさく主張するのでパシリの若者2人が訓練がてら見張りに付けられたのだ。
益口寿夫は目立たないが実はちょくちょくテレビの仕事をしていた。元々腹話術師でしゃべりが上手く、別の名で声優もしていた。顔芸も得意なのでコントのちょっとした脇役も器用にいい仕事をした。はたまた別の名で俳優として昼ドラの気のいいおじさん役や、皮肉にも振り込め詐欺にあってしまう気の毒なお爺ちゃんや、時代劇で悪代官にお店やかわいい一人娘を取り上げられてしまう正直で善良な商人など、どちらかというとかわいそうな小市民の役を多く演じている。マスター・パピーのイメージからしてやくざの親分やそれこそ嫌らしさたっぷりの悪代官などやったら似合いそうだが、そうした役はやらないようだ。
益口寿夫はマスター・パピー以外でも、　風貌の割りに目立たないが、けっこうな売れっ子なのだった。
毎日ちょこちょこ出かけていって小さな仕事をそつなくこなし、素顔はいい年したおじさんで、張り付いている新米刑事2人にはとてもこの好人物が凶暴な殺人事件を裏から操っている妖怪じみた極悪犯罪者には思えない。
1週間経ち2週間経ち、アホらしくて、すっかり張り込みも尾行もいいかげんになっていた。

久しぶりにマスター・パピーとしての仕事があった。
平日お昼のバラエティー番組にゲスト出演し、会場１００人の女性たちに4択のアンケートをし、きれいに２５人ずつ４つに分ける、というのに挑戦した。
アンケートのお題は「彼氏にしたいのは誰？」という実に他愛ないもので、ステージの、若手イケメン俳優、お笑いタレント2人、

ベテランの性格俳優、の４人から選ばせる。
マスターはひな壇のお嬢さんたちの反応を見ながら４人それぞれに面白おかしいポーズを取らせていった。
そうしてオーケストラの指揮棒を振って、「はい、せーの、ポンッ」と手元のボタンを押させた。
電光掲示板に現れた結果は、惜しくも２５対２５対０対５０で、
「おっ、おおっ、え～～～！？」の声で「なんでやねんっ！？」と声を上げる「０」のお笑い芸人といっしょにマスターはずっこけた。
「５０」のベテラン性格俳優はでへへえ～と照れまくった。この結果にマスター・パピーは不満も露わに
「おいおい～、スタッフ君～、打ち合わせと違うじゃないかあ～？」
と、最初から仕込みであったかのようなことを言って笑われた。
しかしその笑いの中にほぼ１００点満点の結果に対する驚きのどよめきが大きく含まれていた。
マスター・パピーはシルクハットを取り、白塗りの気味悪い顔にニカッと大きな笑いを浮かべ、出番を終えた。

そんな愉快なひとときを過ごし、化粧を落とした益口寿夫は一般市民として駅前通の雑踏の中を歩いていた。
刑事２人は雑踏の中でもあるし、とっくにやる気もなくしてまるで不用心にただ後を追って歩いていた。
その１人が、突然
「うっ」
とうめいて、雑踏の中、道の真ん中で座り込んだ。
先に行きかけた相棒はあれ？と気づき、
「おい、なにやってんだ？」
と声を掛けた。
座り込んだ相棒は青い顔を上げ、

「・・・背中・・・・・」
と小さな声で言った。
その後ろで「きゃああっ」と若い女が派手な悲鳴を上げた。
「この人、背中にナイフが刺さってるう〜〜〜っ！！」
「なにいっ？！」
刑事は相棒の背中に回り込んだ。
左の腰、背広の上から、刃の厚い幅のあるアーミーナイフらしき物が深々と突き刺さっていた。
「ちくしょうっ！　動くなよ、今救急呼んでやる！　おおーい、誰か！　駅の人間呼んでくれ！　頼む！急いでくれえっ！！」
駅前の雑踏は騒然となり、やがて駅から駅員と警官が駆けつけたが、その頃には、益口の姿はとっくにどこかに消えていた。

１６　犯人逮捕

容疑者尾行中の刑事が刺されたなど、とんでもない失態だが、これで捜査陣にはやはりマスター・パピーは怪しいという見方が強まった。刺された刑事は手術でナイフを抜き取り、重傷であるが、命に別状はない。刺された刑事は刺したのは頭を派手な金色に染めた若い男だと思うと証言したが、今どきそんな若者はいくらでもいるし、今のところこれといった手がかりはない。少なくとも刺した犯人が「直接は」益口ではあり得ない。

マスター・パピーが怪しい。
しかしどうやったのか？
具体的なやり口がまるで分からない。

どう捜査を進めたらいいか頭を悩ませているところに、犯人が確定されたという知らせが入ってきた。
捜査陣はそれを当然顔写真の公表されたキャバクラ大量強殺事件の男だと思ったが、違った。

確定されたのは、
マンションでＯＬを殺害した男だった。

容疑者の名は
多田　憲治（ただ　けんじ）
２４歳、コンビニアルバイト店員。

多田は動機の点で当初から容疑者の筆頭にあげられていた。
状況的にも怪しい。
現在アルバイト店員の多田は、以前は商社に勤め、将来を誓い合

っている女性がいた。
　しかし会社の業績悪化で厳しいリストラが敢行されているただ中で、多田はあろう事か電車内の痴漢行為で逮捕された。多田は事実無根だと容疑を認めなかったが、厳しい取り調べの末、被害女性の示談にしてやっても良いという言葉に、ついに折れ、結果的に自らの有罪を認めてしまった。
　多田は留置所を釈放されたが、会社からは懲戒免職を言い渡され、付き合っていた女性からも婚約破棄された。
　多田を痴漢行為で訴えたのが、殺された被害女性だった。
　多田の痴漢行為が実際のところどうだったのか分からぬが、多田が被害者をひどく恨んでいたのは間違いないだろう。
　場所もある。
　多田が勤めているコンビニは、現場マンションから少し行って出た幹線道路沿いにあり、2者の距離は2キロほどだった。
　その夜多田は1人で店に出ていた。
　現場までの時間が、例えば多田の使用しているサイクリング自転車を使ったとして、１０分ほど、犯行と合わせて往復２５分程度。
　店をそれだけ開けていたらその間に誰か客があり、誰も店員がいなければ怒って帰ってしまったかも知れない。そうした人物を捜して聞き込みを行ったが、見つからなかった。
　顔と手のマスクに返り血を浴びた服と、犯人が隠さなければならない証拠品はたくさんある。一帯を捜したが見つからず、多田が犯人でコンビニに持ち込んでいたら、たとえ今は別のところに持ち出して現物がなくても、血の跡など証拠はきっと残っているはずだ。
　警察は店主に店内の捜査を求めたが、多田は烈火のごとく怒って反抗した。
「警察はまた無実の俺を証拠をでっち上げて犯人に仕立てるつもりか！？」
　と。店主も多田の事情は知っての上で雇ったので、それもひどい話だと、捜査協力を断った。

一方で、
多田の無罪の証拠になればと、店内の防犯ビデオの録画データを提供した。
その映像の中に、犯行のあった時刻とその前後、多田は確かに店にいた。
深夜で客は滅多におらず、レジ奥の休憩所に引っ込んでいる時間はあったが、３０分の間に2人の客があり、確かに多田はレジで対応していた。
何か操作をしてデータを改ざんしていないかと前後を幅広く調べたが、どこにもその跡はなかった。
これは、多田をシロと見るしかない。
警察は、多田に詫びを入れた。あなたの容疑は晴れました、と居丈高ではあったが。

しかし。

その録画データのカラクリが暴かれた。
なんのことはない、別人だったのだ。
よく似ていた。
多田はフレームの太い特徴あるメガネを掛け、今流行りの芸能人を真似して片側をツンツン立てた髪型をしていた。防犯カメラを誤魔化すくらいの変装は楽に出来た。
しかしその画像を詳細に調べると、替え玉には本人にはないほくろがあった。大体においてはそっくりだったが、細部がお粗末だった。
この証拠でコンビニを家宅捜索し、天井裏から犯行に使われたマスクとグローブとジャンパーとズボンがそっくり見つかった。
アパートで寝ていた多田は緊急逮捕された。
「宅配便」に騙された多田は「ちくしょお！」とわめいて暴れたが、数人のごつい男たちに取り押さえられた。

容疑者の権利を読み上げる刑事に、
「ああ、ああ、分かってるよ！
そーだよ、俺が殺したんだよ、あのクソ女をよお！
俺の人生ぶち壊しやがったあの女を、俺が、この手で、ぶっ潰してやったんだよおおっ！
けっ、ざまあみやがれ、馬あ鹿がっ！
俺はあの女のケツなんて触っちゃいねえ！　俺は無実だ！　無実なんだよお！　分かったか！？
俺は、
無実だ！！！！
分かったかああっっ！！？？」
と大声でわめき散らした。
それは、容疑者の権利で読み上げられたとおり、自供として証拠採用される。

警視庁に連行された多田は、今、厳しい取り調べを受けている。

そして、多田の部屋が捜索され、さまざまな品物が証拠品として押収された。
その中に、ＰＢ３があり、その中には、プリントのない、ＤＶＤ－ＲＯＭが収まっていた。

栗林素雄の持っていたのと同じ無修正バージョンの「スーパーウルフマン」だった。

17　海賊版の出所

取り調べで替え玉を演じた男が誰なのか、多田は
「名前なんか知らねえ」
と言った。
「たまに若いくせにホームレスみたいな汚ねえ臭っせえ奴が来てたんだよ。やな客だなあって思ってたんだがよお、気が付けば、そいつ、俺によく似た顔してんだよ。俺はどうやってアリバイを作ろうかって思ってるところだったから、協力を持ちかけたのさ。そいつは金になるってんで喜んで話に乗ってきたよ。名前なんか、聞いてねえ。これが済んだらもうここには来るなって言っておいたから、もうとっくにどこかに行っちまってるよ」
とのことで、この協力者を見付け出すのは難しそうだ。
衣川刑事が強い興味を持って訊いたのが
「スーパーウルフマン」のマスクとゲームソフトの入手先だ。
「買ったんだよ、男から」
と多田は言った。
「電気街に行って、なんかめちゃくちゃ暴力的なスカッとするゲームがねえかって見てたんだよ。最初っから自主規制してるぬるい奴ばっかりでさ、つまらねえなあって思ってたら、『お兄さん。特別な出物があるんだけど、興味あるんじゃない？』って声を掛けてきたんだよ」
「それはいつのこと？」
「リッキーが人を殺した翌日だよ」
「即答だね」
「ああ。朝のワイドショーで大騒ぎしてたからな。俺は夜勤を上がってきて、寝ようと思ったんだが、そのニュースを見てなんだか興奮しちまってさ。俺も『スーパーウルフマン』の発売を楽しみにしてたんだよ…。それに、俺も、殺してやりてえって思ってさ……

…」
「で、その男は何を君に売ろうとしたんだ？」
「『スーパーウルフマン』の海賊版とプロ仕様のマスクさ。人のいないビルの陰に連れていかれて手提げ袋の中を見せられたときは、俺も驚いたね。何者だこいつ？って思ったよ」
「どんな男だった？　年齢、服装、人相は？」
「それは…」
多田はニヤリと取り調べの衣川刑事を見て嫌な笑いを浮かべた。
「あんたらも知ってるよ。あの、手配されてる写真の男だよ」
衣川も、いっしょにいた同輩と記録係の若い刑事も、一様にハッと驚いた。
刑事たちの驚く様子を眺めて、多田は得意そうに言った。
「えっへへ、驚いたあ～。へへっ、俺も驚いたけどな、あいつがあんなすげえことをやらかして。あれはぜってえ俺の事件に張り合ってやったんだぜ？　あいつ、ぜってえ危ないゲームマニアだよ」
衣川は思わず顎に手をやって考えた。あの３０代…３５くらいに見える男は、ハードボイルドな感じに見えたが、それは架空の世界に浸って遊戯するマンガっぽいキャラクターに過ぎなかったのだろうか？

こいつが、一連の事件の中心人物なのだろうか？

衣川は訊いた。
「もっと詳しく。そいつは君に何を言った？」
「『スーパーウルフマン』は発売中止になるから、世に出ることはない。これはお蔵入りにされるのが許せない制作スタッフからの流出物だ。是非コアなプレーヤーに楽しんでほしいそうだ。このマスクも、撮影でリッキーが着けるはずだった物だ。おまけに付けるから楽しんでくれ。と、まあそんなところだったかな」
「それで、君はそれをいくらで買った？」

「セットで１万５０００円。初回限定特典付きの新作ソフトなら、妥当な値段だろう？　本物の特撮マスクなんて、超レアだぜ？」
「その男と話したのはそれだけ？」
「ああ。：あ、別れ際、君みたいな同好の士と巡り会えてラッキーだったよって笑ってたな。：それだけだよ」
「君は以前から被害者を殺そうと思っていたのか？」
「：：ああ。当然だろうが？　あのクソ女。俺はあのクソ女に指一本触っちゃいなかった。俺の、俺の人生ぶち壊しやがって。俺には、復讐の権利がある。そうだろう！？」
「君は被害者の住所をどうやって調べた？　弁護士に確認したが、君は被害者があそこに住んでいるのを知らなかったはずだ」
「偶然だよ。俺のバイト中に男と買い物に寄ったんだよ。あの女、すぐ目の前にいながら男といちゃいちゃしゃべくって俺のことにまるで気づかなかった。もっとも、俺も会社首になってからイメチェンしたからな」
「偶然だねえ、君の新しい勤め先が彼女の家の近所だったなんて」
「ああ。神の配剤だろうぜ、復讐の神のな」
「それで、君は彼女の住所を調べた？」
「ああ。非番の日もコンビニの近くで張って、また彼氏の車で通るのを待ったよ。確かにな、近所でラッキーだったぜ。遠けりゃ自転車で追跡なんて出来なかったからな」
「その幸運のおかげで君は殺人犯になってしまったんだがねえ。どうしてマスクを被って：：、いや、
君、
『スーパーウルフマン』はやってみたかね？」
「もちろん。すっげー面白くて興奮したぜ？」
「そうみたいだね。うちの若いのにもやらせてみたけど、思いっきりのめり込んでいたよ。君は、どう？　今ものめり込んでやってるの？　っての は無理だが、そうだな、ゲーム脳っていうのか？こうしてゲームが出来なくなってしまって、禁断症状なんて出ないかね

？」
「いや」
多田は自分でもそういえばと思うのか、ぼうっとした、釈然としない顔になって、言った。
「・・・別に・・、もういいや。女はぶっ殺したし、クリアしちまったから・・・・・・・・・」
多田は言った後も不思議そうな顔で自分の頭の中を覗いている風だった。
『スーパーウルフマン』はアクションゲームだ。プロデューサーの話ではクリアまで上手い人間なら１６時間くらいで出来るそうだ。クリア後もお楽しみ要素があって何度も繰り返し遊べると・・・・。
衣川はじっと多田の様子を観察した。多田がバイオレントなアクションゲームを好む人間なら、２度３度と繰り返しプレーするはずだ。それをしないのは、やはり女性を殺害したことを後悔して、事件を思い出したくないからか？
衣川刑事は訊いた。
「クリアしたのは女性を殺害した前かね？」
「ああ・・・・・。その、前の日だよ・・・・・・」
「ゲームをクリアして、女を殺そうと思ったのか？」
「ああ・・・・、そう・・・・だ・・・・・・・」
「ゲームの最後は、どうなるんだ？」
「スーパーウルフマンを殺すんだ・・」
「スーパーウルフマンを殺す？　スーパーウルフマンは主人公だろう？」
「呪いが解けるんだ・・・・、研究所でウルフ遺伝子を分離して・・・・。でも、敵の組織がそれを使って新たなスーパーウルフマンを誕生させるんだ。主人公・・・・、俺は・・・・、そいつを倒すためにもう一度ウルフ遺伝子を注入して、スーパーウルフマンの上を行く、ウルティメートウルフマンに変身して、スーパーウルフマンを倒し、研究所が爆発し、ウルティメートウルフマンになってしまったらもう人間

の姿にも戻れないから、俺は、闇の中へ、消えて行くんだ……」
衣川は話を聞いて眉をひそめた。
「そうなったのかね？」
「そうだよ…」
違う。プロデューサーに聞いた話では、ウルフマンは人間に戻り、敵の対ウルフマン兵器を使って自分をウルフマンにしたオリジナルのウルフマンを殺し、復讐を完遂するのだ。ラストファイトは「VSスーパーウルフマン」とは決まっていない。相手も月齢によって形態が違う。そこがまたやり込み要素につながる計算だ。
ウルティメートウルフマンなる設定はないはずだ。
それともそれがクリア後2巡目以降の「お楽しみ」なのだろうか？
開発者に確認しなければ分からない。
衣川はもう一つ訊いた。
「君、催眠術に掛けられたことはあるかね？」
「催眠術？」
多田は怪訝な顔をした。
「いいや。そんな物、興味ねえ」
「マスター・パピー」
「はあ？」
「マスター・パピー。
……。
知ってるかね？」
「知らねえな。ゲームのキャラかよ？」
「ゲームの…。ま、ある意味な」
多田はマスター・パピーの名前に反応しない。知らないようだ。
また催眠術に掛けたら…、分からないが……。

18　誰のマスク？

一連の事件、1件と2件と1件の事件の犯人は別々だった。
しかし明らかな共通項が多い。
プロ仕様の「スーパーウルフマン」のモンスターのマスク。
ふつうでは考えられない凶暴すぎる暴力。異様な運動能力に、怪力。
そして、売る男と買った男たちで「スーパーウルフマン」のゲーム自体がつながった。
華奢な栗林素雄ももちろんだが、多田憲治も文化系の人間で、格闘技はもちろん、スポーツ自体何もしていなかった。
多田は自分の凶暴な犯行について、
「心の底からあの女を憎んでたんだよ。ただ殺すだけなんて、それじゃあ憎しみを燃やし尽くすことが出来ねえんだよ」
と言った。日常的に苛められていた栗林も心情的には同じだっただろう。
しかし、
だからといって、思ったからといって、出来ることではない。
その点多田は、
「分からねえよ。ただひたすらカアーッて熱くなってただけだよ」
と言って具体的な説明は出来なかった。

しかし、ともかく、
残りの凶悪犯はオールバックの３０代のキングコブラ男１人だ。
こいつは、
顔写真が公開されて早１ヶ月、すぐに素性が割れると高をくくっていた捜査陣の思惑は外れ、一般から多くの情報は寄せられるものの、有力な情報は確認できずにいた。
この独特の面相で何故人物が割り出せないのか、警察は焦り、世

間には男と事件に対する不気味な不安が膨れ上がっていた。

さて、手がかりを求めて衣川刑事は忙しい。

出来上がった刀脇力丸のライフマスクに、十分な検査の後、２つのモンスターマスクを合わせてみることにした。

重要な証拠品を持ち出すわけには行かず、これは警視庁の一室で行われた。

監修者としてすっかり顔馴染みの菅原・スカー・一馬が呼ばれた。

手袋をはめ、

まず菅原に2組の現物を見てもらった。

「どちらもプロの作った物だが、やっぱりこっちの方が細部までていねいに作り込まれている」

と、マンション事件の多田の方を指して言った。

「こっちも十分な出来ですがね」

と、コンビニ事件の栗林の方にもフォローを入れて。

「やはり誰が作った物か、分かりませんか？」

「分かりません、よ・・・」

「そうですか」

衣川刑事はさらっと流して、メインの実験に移った。

「では。破いちゃたいへんですんでね、プロの方にお任せしますよ」

と、菅原にマスクを指して言った。

菅原は、まず栗林のマスクを手に取り、それにはマスクの内側にも栗林の吐いた血がべっとり付着していて、菅原は「本物」の感触に顔をしかめながらマスクの首を丸く広げ、刀脇の白い石膏の頭に被せた。慎重に、顔に被せていく。

「・・・・・ぴったりです」

衣川刑事も見て言った。

「ですなあ。間違いなく刀脇力丸の顔に合わせて作られたマスク、でよろしいですな？」

菅原は仕方なくため息をつきながら頷いた。

「では次のマスクを」
菅原はまた慎重に多田のマスクに付け替えた。
「これも、同じく、ですな？」
「ええ。ご覧の通りですよ」
菅原はあつらえてぴったりのモンスターマスクを見て疲れた暗い目をした。
「グローブの方もそうでしょうな？」
「ええ。それもリッキーのサイズですよ」
「ねえ菅原さん」
衣川はまるで慰めるように話しかけた。
「あんたが善人で、社会常識を持ち合わせた人だってのは分かってます。どうですか、そろそろ話してくれませんか？　これを作ったのが誰か、もう分かってるんでしょう？」
菅原は、
「・・・・・・・・・・はあーーー・・・」
と大きく息をついて、観念して言った。
「出来のいいのが井上の作った物、もう一つが松浦の作った物です」
「間違いありませんか？」
「ええ。ほぼ、１００パーセント」
「ありがとうございます」
衣川は菅原の肩をポンポンと叩いた。
「そんなに思い詰める必要はありませんよ。これを作ったのが彼らってだけです。別に犯罪じゃない。そうでしょう？　我々は手がかりが増えて喜んでいる。感謝してるくらいですよ」
「そうですか。・・・しかしあいつらなんでこれを・・・」
「さ、それを聞こうじゃありませんか？」
またポンポンと肩を叩かれて菅原は「ええ」と答えた。

撮影所の敷地内にある中型の倉庫、スカーレッド第２スタジオ。

ドアを入ると、ムッとひどい臭いがした。
「あ、お帰りなさい」
と入り口近くのデスクでパソコン仕事をしている松浦が声を掛けた。
「只今ＦＴＰ大量硬化中。みんな避難して飯食いに行ってます」
中央の広いスペースに青いシートを広げて、外から見たのでは何を作っているのか分からない合わせられた「型」が２０ほど並べられている。これから鼻の奥をヒリヒリさせる刺激臭が発生している。衣川刑事は思いきり顔をしかめて、気持ち悪そうにした。
菅原は松浦に訊いた。
「おまえは、飯は、いいのか？」
「僕は・・・」
キーボードをパチパチッと叩くと、顔をこっちに向け、泣き笑いのような表情を浮かべて松浦は言った。
「僕に用があるんでしょ？　もう・・、ばれちゃってんでしょ？」
「やっぱりおまえが・・・」
「ごめんなさい」
松浦は泣きそうな顔で頭を下げた。
「僕と井上さんです、マスク作ったの。井上さんに言われてリッキーのライフマスクを捨てたのも、僕です。すみませんでした」
「なんで二人して同じマスクを作ったんだ？　あれは、必要ないだろう？」
「だって、僕らだって作りたかったんですよお、ウルフマンのマスク。井上さんが俺たちに下っ端仕事させて美味しいとこはスカーさんがやっちまうんだよな、つまんねえな、って言って、僕もそうっすねーって同意して、そしたら井上さんが、俺たちも作っちまわねえか？って言い出して、どうせスカーさん『幻魔』のデザインで忙しいから、マスク渡すのが少しくらい遅れたってかまわねえだろう、ってことで、遊びで、一晩ずつ代わり番こで作っちゃったんですよ」
「なんだよ、しょうがねえ奴らだな」

スタジオ主催者の菅原はむしろスタッフたちのどん欲さに微笑んだ。だが。
「別にいいよ、それは。それで、どうしたんだよ？　作ったマスクは、どうした？」
「それが、」
松浦は叱られた小学生みたいに情けない困った顔をした。
「なくなっちゃったんです、いつの間にか」
「どこから？」
「ここ。奥の段ボールにこっそり隠しておいたんすが、それが、いつの間にか・・・」
菅原は衣川刑事と顔を見合わせた。
「井上は？」
「井上さんもおまえどこやっちゃったんだよおって怒りましたが、僕、知らないっすよ。僕らじゃないっす。きっと誰かが表のゴミ箱に出しちゃって、それを誰かがいい物捨ててやがんなって、持って行っちゃったんですよお～」
菅原は渋い顔で考えた。
確認無しでスタッフがゴミ出しするとは考えられない。その後の成り行きからして、
誰かが故意に持ち出したとしか思えないが・・・・・。
菅原は恐い顔を作って今一度松浦に訊いた。
「おまえは、本当にどこかに持ち出してないんだな？」
「してません。俺は井上さんに言われてリッキーのライフマスクを捨てただけですう！」
ぶるぶる顔を振る松浦を見て、菅原はつぶやいた。
「井上・・・か・・・・・・」

時間が経ち、硬化の早いＦＴＰはやがて臭いの発生を急速に止めていった。グワングワンとあちこちで回っている大きな換気扇が外へ薄まった臭気を吸い出していく。

クン、と鼻を鳴らして衣川刑事が言った。
「ここじゃあ生ものも扱ってるんですか？」
「生もの？　いや、造形の参考に持ち込むことはありますが・・・・」
菅原も気づいてクンと鼻を鳴らした。
「本当だ。なんの臭いだ？」
「な、なんすか？」
松浦が泣きそうな不安な顔で訊いた。
刑事は知っている、これは、とても
嫌な臭いだ。

19　地獄パノラマ

有機溶剤のヒリつく臭いに慣れた鼻にも、それはまったく異質で、胸の悪くなる臭いだった。
異質だが、容易に想像のつく臭いだった。
菅原は松浦に訊いた。
「おまえいつからここにいるんだ？」
「僕も外から帰ってきて、井上さんと入れ違いに。みんな飯に行って誰もいねえぞって。それで僕、じゃあ留守番してますって……」
松浦は「なんすかあ？」と泣きそうな顔で鼻をグジュッとすすった。
「刑事さん、これは…」
「ええ、この濃さは、ふつうじゃないですなあ…」
衣川刑事は携帯を出して、掛けた。
「稲村。俺だ。おまえ今どこだ？　よし、じゃあ3、4人連れて撮影所のスタジオスカーレッドに来い。急げ、サイレン鳴らしてこい。あ、それとな、全員拳銃持ってくるように。いいから、急げ！」
電話を切ると、衣川は背広の下のフォルダーから拳銃を出し、カチッと安全装置を外した。青い顔で見る菅原に、
「わたしも人を撃ったことはありませんがね、覚悟しといてくださいよ」
と緊張を隠さずに言った。
菅原は松浦に訊いた。
「井上は外なんだな？」
「え、ええ。戻ってませんよ」
「そうか」
菅原は目で刑事に確認し、頷いたので、思い切り青い顔をしながら「臭い」の元を捜した。
作業台の下、大型工具の陰、棚の陰、

棚の・・・、コンテナ・・・・・・。
出来上がった「魔界鬼」の腕が入っているはずのコンテナを引っぱり出して中を覗いた菅原は、
「うわあああっっっ！」
と、いつものクールさをすっかり忘れて大声を上げ、後ろに飛び退いた。
「どうしました？」
「かかかかか・・」
あわあわと顎を痙攣させて震える指で差して、ようやく言った。
「顔・・・、丸山の顔が、入ってる・・・・」
「誰です？」
「う、うちの、お、女の子・・・・・」
スカーレッドに女性スタッフは2人いる。その2人の顔を衣川は思い浮かべた。

青いコンテナの中に、鬼の腕を血に染めて、口を半開きにした丸山の顔がじっと恨めしそうな目をして入っていた。

首だけ。

衣川は拳銃を構えて周囲を油断なく見渡しながら、自分も近くの棚のコンテナを覗いていった。
「うっ・・・・・・・・・」
そこにも、舌を半分飛び出せて白目を剥いた男の血まみれの生首が入っていた。
「うひゃああっっ」と松浦も悲鳴を上げた。
「あああ、あれ、ちちち、血がっ！」
椅子の中でずり落ちそうにしながら松浦が指さす棚の中、そこはずらりと魔界鬼の顔と胴が並んで置かれていたが、その顔の一つ、胴の2つからボタッボタッと赤黒い液体が流れ出して滴を落として

いた。
刑事は横に歩いていって、胴を持ち上げてみた。中でゴロッと丸い物が転がる感触がした。上の鬼の顔を持ち上げると、ゴロッと、髪の毛をたなびかせて頭が下に転がり落ちた。跳ねた血が刑事の顔に当たった。
「うぎゃあああああっっっ！！！」
大声で悲鳴を上げて、椅子を蹴倒すと松浦は頭を抱えて机の下に逃げ込んだ。
衣川の足下、血しぶきをこびりつかせた白い肌の女が恨めしそうにじっと上を見上げていた。2人の女の子のもう1人だろう。
もう1つの胴も、きっと中にもう1人の生首が入っているのだろう。それで5人。菅原と松浦と井上の、残りのスカーレッドスタッフの人数分だ。
菅原は衣川の反対の方に立って、転がり落ちた女性スタッフの顔を、蒼白な幽霊のような顔をして、今にも倒れそうにしながら見つめ、言った。
「馬鹿な・・・、そんな馬鹿な・・・、こんな、こんなことが、現実に起こるわけない・・・・・・」
衣川は、さんざんこういう物を作って慣れているであろう菅原の狼狽ぶりを哀れに眺めた。
そうだよ、これは、現実なんだよ、と。
ひどい顔で呆然としていた菅原が、ハッと何かに気づき、
「刑事さん！」
と叫んで衣川の後ろを指さした。棚の裏側に、黒い影が立っている。
作り物が、動いた、と思うと、
ビュッ、
「うわっ！」

長い刃が胸の高さで飛び出してきて、衣川はびっくりして危うく飛び退いた。
ガンッ、と後ろから黒い足が蹴っぽって、鬼の胴が飛び出すと、くるりと回って中から男の生首がビュンと飛び出して空を飛んだ。
「貴様あっ」
衣川が拳銃を構えると、黒光りする未来的なデザインの全身鎧が棚の横に回ってきて、日本刀を振り上げ、ビュン、と斬りかかった。
「くそおっ」
衣川は必死の形相で両手で構えた拳銃を撃とうとした。
「待ってくれえっ！」
菅原が叫んだ。
「井上えーっ！　おまえ、井上なんだろうっ！？」
未来の鎧武者は刀を上に構えて止まった。
映画「幻魔黙示録」の主人公魔界戦士兵衛牙。ゴーグルの目にフルフェイスのマスクで着ている人間の顔はまったく見えない。主人公の顔が見えないのはどうかと思うが、映画の終盤まで主人公はこのかっこうで顔を見せない。ある若手人気俳優が演じることが決定しているが、そのキャスティングは極秘で、映画公開の初日までその正体は一切秘密という仕掛けだ。
しかし、今魔界戦士兵衛牙になっているのは・・・
「答えろおっ！　井上ええっ、おまえなんだろうっ！！？？」
魔界戦士兵衛牙は、
「うるっせえなあ～」
くぐもった不機嫌な声を出した。
「井上えっ！」
叫ぶ菅原に、
「うるせえっつってんだろう？　あんたはなあ、いっつも、目の上のたんこぶなんだよおー」
井上は言った。
「井上・・・」

菅原は泣きそうになって言った。
「なんでだよ？　なんで・・・みんなを殺した？　仲間じゃないか？　なん・・っでだよお～・・・・・」
「いらねんだよ、どいつもこいつも、下手くそなくせにアーティスト気取りでよおー。だがよお、一番邪魔なのは、あんたなんだよ、スカーさんよおー？　俺のデザインいくつも没にしやがってえ～、あんたのモンスターなんてぬるいんだよお～、俺の方が、ずっととんがってんだよお～～」
「馬鹿野郎、おまえのだっていくつも採用してんじゃねえかよおー？　なんで・・、みんなまで殺すんだよお？　俺は、信じないぞ、おまえがそんな下らないことで仲間を殺しただなんて・・、信じてたまるかよお～・・。
・・・聞け、井上。それはおまえの本心じゃない、おまえは、操られているんだ、催眠術で、ミスター・パピーって妖怪に。そうですよね、刑事さん！？」
「そうだ。井上」
衣川は両手で構えた銃をぴたりと鎧の胸に狙いを定め、一時も目を離さずに言った。
「殺人はすべてミスター・パピーが人を操ってさせたものだ。おまえも、もしかして『スーパーウルフマン』のゲームをやったんじゃないか？」
ぐらっ、と、井上の上に構えた刀が揺れた。
「そうなんだな？　おまえも最後までクリアして、ラスボスのスーパーウルフマンを殺したんだろう、ウルティメートウルフマンに変身して？　それがマスター・パピーの仕組んだ催眠術なんだよ。目を覚ませ井上。これは、おまえの意志でやってることじゃあない！！」
ガチッガチッと鎧の首が動いた。迷っているのだ、と菅原は思った。
「井上・・・」

菅原はゆっくり前に歩き、それを察した衣川が、
「菅原さん、来ないでください！」
と制したが、菅原は進み、ちょうど部屋の中央で止まった。
菅原は井上に話しかけた。
「なあ、井上。俺たちの仕事を思い出してみろよ？　俺たちはいかに本物らしく偽物を作るかってことにプライド懸けてきたじゃないか？　ガキっぽいけどさ、人を騙すのが快感なんじゃないか？　それなのに…、本当にこんなことしちゃあ、駄目だぜ？…　おまえのモンスター作りの腕は大したもんだよ。俺はおまえの腕を、最高に買ってるんだぜ？　なあ、頼むよ、おまえの特殊メイクのプライドを、思い出してくれよ？　頼むよ」
菅原は泣き笑いの顔で手を差しのばした。さあ、刀を捨てて、この手を握ってくれ、と。
「スカーさん……、」
刀が、半分、下りた。
「スカーさん…。
実はさ……俺……」
「なんだ？」
菅原は誠実に仲間の言葉を聞こうとした。
「……だけじゃないんだよね」
「え？」
鎧の首がクリッと斜めに傾げ、井上は言った。
「俺だけじゃないんだよね～～」
何を言っているのか？　菅原がいぶかしげにすると、
「菅原さん！！！」
衣川が叫び、拳銃の狙いを横に振った。
「うひゃひゃひゃひゃあ～～っ！！」
「うわああっっ？？！！」

鬼が、こん棒・・・金属バットを振り上げて躍りかかってきた。
振り下ろしたバットは菅原の脚をかすりブルーシートを叩き、「ゴイイ〜〜ン」と固い音を響かせた。
「うひゃひゃひゃひゃあっ」
ブン！、と振り回すバットを無様にひっくり返りながらよけた菅原は、必死になって逃げようとしたが、ずるっとブルーシートが滑ってこけた。ずれたシートの下から大量の血溜まりが現れた。
「うひゃひゃあっ」
「わああ〜〜〜っっっ！！！」

「くそっ」
銃を鬼に向けた衣川は、横からビュッと刀を振り下ろされて慌てて転がってよけた。
「うっはっはっはっはあああっ」
ビュンッ、ビュンッ、と井上は得意になって日本刀を振り回し刑事を襲った。
衣川は、
「・・・・・・・・」
パンッ。
撃った。
パンッ、パンッ、パンッ。
撃った。
「うひゃひゃひゃあっ」
「うわああ〜〜〜っっっ！！！」
パンッ。
撃った。
「がっ、」
カン、カララーン、と派手な音をさせて金属バットは転がり、肩を撃たれた鬼のマスクの松浦はのけぞり、
「うやあああ〜〜っっ！！」

わめいて刑事に襲いかかってきたが、
パンッ。
今度は衣川は冷静に松浦の脚を狙い撃った。
「ぎゃっ！」
叫んで松浦は脚を後ろに飛ばされ、腹這いにビタンと落下した。
衣川はすかさず走り、肩を踏みつけ、
「動くなあっ！」
銃の狙いをもう片方の肩につけた。
「ぐっぐっぐっぐっぐ……、い……、ってええ～……」
激痛に松浦はすっかり意気地をなくして大人しくなった。
血溜まりに転げて、起き上がった菅原は、よろよろ立ち上がって、転がる黒い鎧に歩み寄った。
下に手を伸ばす菅原に、
「菅原さんっ！」
刑事は厳しい声を投げかけたが、菅原はそのまま日本刀を掴んで持ち上げた。
「……これ、切れませんよ……」
「なっ、」
さすがに衣川は驚きの声を上げた。
「なんですってえ！？」
菅原は顔を歪め、唇を噛んで、言った。
「死んでしまった、みんな、みんな、俺の大事な仲間が、俺の大事な財産が……、ちくしょお……」
衣川の撃った銃弾はすべて鎧の胴に命中していた。プラスチックの鎧に本物の強度があるはずもなく、ドクドクと、血溜まりが大きく広がっていった。
甲高いサイレンの音が迫ってきて、止まった。

20　復讐の炎

切れもしない模造品の日本刀に怯えてプラスチックの鎧の人間を4発も銃弾を撃ち込んで殺してしまうなど、ベテランの衣川刑事がとんだ大失態をやらかしてしまった。しかし状況を知ればそれを責められる警察官はいないだろう。部屋には切り落とされた生首が5つも転がっているのだから。

首を切断した本当の凶器、ノコギリは、5つの首なし死体を詰め込んだトイレに放り込まれていた。

肩と脚を撃たれた松浦は見張りの警官付きで病院に搬送された。

我に返った松浦は、

「ぼ、僕、いったい何をやらかしてしまったんだ？　嘘だ、嘘だ、こんなの、嘘に決まってる・・・」

と現実が受け入れられずに怯えきった目でブルブルガタガタ震えていた。

その怯え様から、どうやら松浦も5人の殺害及び解体をいっしょにやったらしい。

菅原と衣川はケガはしていなかったが医者の診察を受けた。ケガより、精神的なダメージが大きい。

一応医者のオーケーをもらった菅原は衣川と話した。

「本当にマスター・パピーが黒幕で、真犯人なんですか？」

「わたしはそう思っている」

「いったいどうやったらあんな風に人を操れるんです？」

「それがわたしにもさっぱり分からなくてね。どうやら『スーパーウルフマン』のゲームを利用しているらしいが、専門家ははっきり『出来ない』と言っているよ」

「でも、奴が犯人なんでしょう？」

「ああ。わたしは、そう睨んでいる」
しばし沈黙し、菅原はつぶやいた。
「許せない・・・。こんなことする奴を、絶対、許しちゃいけない・・・」
「菅原さん・」とそんな様子を衣川は心配した。
「お気持ちは分かりますが、あんまり思い詰めて滅多なことはせんように」
「じゃあ、現実的に」
菅原は冷め切った目で衣川を睨んで言った。
「何かしっぽを掴んで奴を逮捕したとして、裁判で、奴を有罪に出来ますか？　何人も殺させておいて、奴を、死刑に出来ますか？」
「無理、でしょうな、催眠術による殺人教唆なんて、弁護士に簡単にくつがえされちまうでしょうな」
「そうでしょう。駄目なんだ、法律じゃ、奴は裁けない・・・」
「お気持ちは分かりますが、ここは抑えて・」
「俺は信じませんよ、井上が俺や他のスタッフを本当は憎んでいたなんて、あんなひどいことをするほど憎んでいたなんて・。あいつは取っつきづらい奴で、俺だって何度もムッとして、喧嘩だってしましたよ。でもね、俺はあいつの才能は買っていた。それはあいつだって分かっていたはずだ。あいつは、自分がここでしか思い切り自分の才能を生かした仕事が出来ないって知っていたんだ。それを、自分でぶち壊すようなこと、するもんか・・・・・。
松浦だって、あいつはひょうきんな奴でみんなから慕われていた。コンピューターの知識を頼りにもされていた。みんな大好きだったんだ。そんなみんなを、あいつが、あのひょうきん者が、あんなこと出来るわけない・・・。いったいあいつがどんな顔してみんなを襲ったって言うんです？　どんな顔してあいつを慕う仲間の首を切り落とせたって言うんです？　あいつに殺されたみんなは、いったい、どんな顔で殺されたんです？・・・・・・
俺は信じない、井上と松浦が自分たちの『願望』でみんなを殺し、

俺を殺そうとしただなんて、俺は、絶対、信じない……」
菅原は悔しさと悲しさと怒りを堪えられずに、額を押さえてうつむいた。
衣川はじっと痛ましそうに見て、言った。
「わたしもあなたに謝らなければならん。殺さなくていい井上君を殺してしまった。申し訳ない。
これはわたしの罪だ。償わねばならん。
わたしも、自分にこんな罪を犯させた奴を許しはしませんよ。きっちり、決着を付けねばならん。
しかし、今は無理です。わたしは今回の失態で捜査を外されるでしょう。きっと、マスター・パピー、益口寿夫を逮捕することはできんでしょう。しかし、
菅原さん、焦らず待っていてください。わたしも、いずれ、必ず、奴には罪を償わせてやりますよ」
菅原は指の間から怒ったような目を衣川に向けた。
「約束しますか？」
「約束します」
菅原は顔を上げてまっすぐ衣川を見た。
「じゃあ、俺も約束します。やるときは、いっしょにやりましょう」
「はい。やりましょう、必ず」

21　準備期間

スカーレッド第2スタジオの事件後、衣川は被疑者射殺の責任を問われて捜査を解任され、査問に掛けられた。事件の状況から刑事責任を問われることは免れたが、事件への関与は固く禁じられてしまった。

衣川刑事から「マスター・パピー催眠殺人教唆説」を引き継いだ稲村刑事は栗林素雄の部屋から押収したゲームソフト「スーパーウルフマン」と多田憲治の部屋から押収したゲームソフト「スーパーウルフマン」を開発元のＳＵＮＢＲＡＩＮに調べてもらった。

プロデューサーは問い合わせに「ウルティメートウルフマン」の存在を認めた。それはやはりクリア後のお楽しみのボーナスステージで、このボーナスステージ出現には条件がある。

通常のラストボス「ウルフマン」も月齢によって１６の姿があるが、

「一番強いのは十五夜の『スーパーウルフマン』と閏月の新月の『ウルフマンゼロ』なんです。スーパーウルフマンが最強でとにかく無茶苦茶強いんですが、ウルフマンゼロは人間同様に兵器が扱えるんです。しかも体力運動能力は人間よりずっと上ですから、これもすごく強いわけです。この『スーパーウルフマン』か『ウルフマンゼロ』を倒すと、次のプレーではボーナスステージの『ウルティメートウルフマン』が遊べる、というわけです」

しかし

「ボーナスステージですから、最初のプレーでは出ません。そういう風にプログラムが作られています」

とのことで、しかし調べてもらったＤＶＤ－ＲＯＭは、２枚とも、１回目のプレーでボーナスステージになるようにプログラムが書き換えられていた。

プログラミングは数名のスタッフで行っていて、彼らはそれが可能だったが、他にも何人かそれが可能な人間はいた。その中にモンスターデザイン担当の磯坪も含まれていたが、深く追求されることはなかった。磯坪は「マスター・パピーなんて知らねえ」と言うし、それは嘘ではないだろう。ただ、現在の本人が知らないだけの可能性もあった。……刀脇力丸のように……。無理にそれを思い出させようとすれば……、何が起こるか分からない。いわばその記憶は、パンドラの箱だった。催眠のメカニズムが解明されない以上、これ以上の危険は犯せない。

ゲームの線からの追求は、これで打ち切りになった。

マスター・パピーの見張りは続けている。今度は若手とベテランが組んで当たっている。

しかしマスター・パピーは相変わらず地味ながら堅実な芸能活動を続け、これといった怪しい行動は見受けられないでいる。

一番の本星であるキャバクラのオールバックのコブラ男は、いまだに発見できずにいる。

どこの誰なのか？　市民提供の情報で「似ている他人」は何人か犯人ではないことが確認されたが、ズバリ本人には行き当たっていない。

事件から2ヶ月3ヶ月が経ち、捜査陣にはすっかり長期化への焦りが濃くなっている。

手術で銃弾を取り出し、入院してなんとか落ち着いた松浦は、夢のように事件を思いだしては毎日泣き暮らしていた。

松浦も井上も同じ「ウルティメートウルフマン」バージョンの「スーパーウルフマン」のコピーＤＶＤ－ＲＯＭを持っていた。

松浦はそれを井上にもらったと言った。もらった時期はやはり刀

脇のＣＭ撮影の事故の２日後だと言う。
松浦もやはりマスター・パピーに会ったことはないと言った。
本当かどうか、確かめることは出来ない。
改めて、何故あんな事件を起こしたのか訊かれると、松浦はぽろぽろ涙をこぼして、
「分かりません。僕は、自分がなんだか凄く強くなったような気がして、それを、みんなに……、自慢……したかった……のかなあー……」
と、それ以上は「分かりません」を繰り返すのみでらちがあかなかった。

その間、刀脇力丸の不起訴が決定していた。
被疑者は事件当時心神耗弱状態にあり、その責任を問うことは出来ない、と。
記者会見に望んだ刀脇は深々と頭を下げ、法的責任はともかく、自分がやってしまったことは事実であり、その責任は一生背負っていかなければならない、被害者とご遺族に心からお詫びし、許されるのであるならば亡くなられた藤原さんの墓前に花を供え、お詫びしたい、と涙ながらに述べ、今後の芸能活動については状況が変わって今の謹慎が解けるまで無い、と明言した。

そうして、以降何も起きず、何も進展せず、最初の刀脇の事件から早半年が過ぎた。

22　罠

益口寿夫はマスター・パピーとして土曜深夜の若者向け情報バラエティー番組にゲストで呼ばれ、女の子たち相手にちょっとエッチな催眠術を披露して、午前2時30分、上機嫌ながら眠くて大あくびしながら、テレビ局の呼んでくれたタクシーに乗って帰宅の途についた。

まるまる膨らんだ首のお肉に顎を埋めて、むにゃむにゃと、重く閉じがちな目蓋の下から道路灯だけが走っていく寂しい夜中の景色を何の気なしに眺めていた。

20分も走って、『うん？』と益口はおかしく思った。

「ねえ、運転手さん、ちゃんと○○市に向かってる？」

「ええ。道は分かってますよ」

「ああ、そう。ならいいけど」

益口は首に顎を埋めながら、不安そうに窓の外を眺め、首を傾けて道路の標識を見た。

「おい！　運転手さん！　やっぱり違うじゃないか！？　全然別の方向だよ！」

益口は怒って言ったが、運転手は慌てず、

「いえ。この道でいいんです」

と言った。

「違うって。○○市だよ？　分かる？○○市？　埼玉の、○○市だよ？」

どこか別の市町村と勘違いしているのだろうと一生懸命説明する益口を、運転手は口を薄く歪めて笑った。

益口はルームミラーの中にそれを見て、ギョッと、怯えた顔になった。

「なんだ？　どういうことなんだ？　あんた…、本当にタクシーの運転手なのか？」

運転手は薄笑いを浮かべ、通行のない道路をグンと加速した。
益口は強張った顔に脂汗を浮かべ、この状況からどうやって脱出しようか思案したが、けっきょく、
「くそっ」
と運転手の襟に掴みかかった。すると運転手は
「シュッ」
と、何かのスプレーを益口の顔に噴きかけた。
「うっ、……う〜〜〜む……」
途端に益口の目がとろんとなり、シートベルトに引っぱられて背もたれに落ち着くと、「くあ〜〜」とよだれを垂らして眠りこけてしまった。

益口が
「う……む？……」
と目を覚ますと、真っ暗で、窓に顔をつけて見回すと、高いところに小さな壊れた窓があり、暗い空からさっと白い光が射し込んだ。
昼の明かりではない、夜の、高い天にある白銀の月の光だ。
「どこなんだ、ここは？」
臆病に周りをきょろきょろ見渡すと、月明かりにあちこちごつごつと何か工作機械が照らし出された、どうやら工場の中らしかった。それも、木材やパイプが乱雑に散らばった、どうやら廃工場のようだった。
まるでいかにも幽霊でも出てきそうな様子に、益口は怯え、さんざん誰もいないのを確認して、ようやくシートベルトを外してドアを開けようと手を掛けた。すると、
ダンッ、
とボンネットに何か降ってきた。

益口は「ひゃあっ、」と心臓を躍り上がらせた。
ボンネットに載った物を見て、
「うわあああああっっ」
と悲鳴を上げ、慌ててドアを開けようとしたが、どこかで「ガラアアン：」と何かの倒れる音がして、ギクッと思いとどまった。
恐る恐る、その物を再確認する。
ちょうど月のスポットライトに照らされたそれは、

男性の生首だった。

しかもそれは、益口のよく知る顔だった。

「ジミー……」
それはかつてコンビを組んでいた相棒で、現在はマネージャーを務めている清水二郎だった。
清水二郎は横に倒れて、斜め下を向いて、こちらに顔を見せている。
恐い目になってじっと清水の顔を見つめていた益口は、
「……ふ、ふふ、うふふふふふ」
とおかしそうに笑い出した。両手を上げて、
「分かった分かった。これはいったい何の番組なんだ？　おいおい～、こんな爺さん驚かせて、何が面白いんだ？　面白かったか？　もういいだろう、勘弁しておくれよ。オレ、心臓が止まってポックリ逝ってしまうよ？　おい、ジミー？　君もいるのか？　この仕事は、趣味が悪すぎるぞお～？」
恐怖をぬぐい去るように、益口は饒舌にしゃべった。
「お～～い、ジミー？　出てきてくれよお～？　哀れな相棒を助けておくれ～？」
清水はマネージャーだが、奥さんの体が弱いので、電話応対でスケジュール管理をし、益口に同行して現場に来ることは滅多にない。

「おお〜〜い、ジミイー？」
益口は脂汗を浮かべる顔に大きく「マスター・パピー」の笑いを浮かべ、おどけた声で呼びかけた。
しかしなんの返事もないと、笑いを引っ込め、むっつりと、険悪な顔になった。
ジロリと清水の生首を見る。
うつろに上を向いた瞳が半分目蓋に隠れている。
筋肉の張りが失われて下顎が歪んでだらしなく半開きになっている。
益口はじっと生首を見た。こんな物が本物の訳はない。作り物に決まっている。自分を怖がらせて、どこからかじっと反応を見ているのだろう。まったくなんのつもりだろうか？
益口はギョッとした。
眉を吊り上げ、ギョロリと剥いた目玉でじっと生首を見た。
今、目蓋がかすかに動いたような・・・、
気のせいか・・・・・・・

「うわわわわわあっ！」

悲鳴を上げて逃げ腰になり益口は背もたれをガリガリ掻いた。
動いた、清水の目蓋が、ヒクリと、確かに！

「うわあああっ！！」

益口は悲鳴を上げた。
清水の目が、自分を見た。瞳が、確かに、自分の顔を見ている。
「わあっ」
益口が反対の席に逃げると、清水の目は恨めしそうに上目遣いで益口を見た。
「わあああっ！！」

生きてる、と益口は思った。だって、焦点が合っている、瞳が自分を見ている。生きているじゃあないか！？

「ます・・た・・・・」

「うわあっ！？」

益口は恐怖の悲鳴を上げた。清水の口が、自分を呼んだ！

「じじじ、ジミー？・・・・・」

清水の生首は、疲れたように目蓋を重くし、先ほどの目の光はもう無い。

「ジミー？・・・・・・・・・・」

益口は恐る恐るじいっと清水の顔を窺った。

もう・・・・、死んでいる・・・・。

しかしさっき自分を見て呼びかけたのは、幻聴か？

いや・・・・・・。

フランス革命の時代まで、公開で行われたギロチン刑。

切り落とされた首は、数分間生きていたという話があるじゃないか・・・・・・

ドクドクと緑色のボンネットに黒く血を流している生首は、まだ新鮮だ・・・・・・。

「ううっ・・・・・・・」

益口は顔を引きつらせて息を飲んだ。

本物だ、と、

益口は信じた。

「うわああっ！！」

益口は悲鳴を上げて太った体をドタバタさせ、堪らず外へ出ようとした。が、

「ええっ？？」

ロックを外してもドアが開かない。ノブをガタガタ乱暴に動かしてもドアに反応がない。
ヒュン、と何か飛んできて、目の前の窓ガラスに「ドンッ」とぶつかった。
肩から引き抜かれた裸の腕だった。
腕は下に落ちたが、べったりと、飛び出した血が窓ガラスを伝い落ちた。
「うぎゃああっ」
益口は反対側に飛び退きドアノブをガチャガチャさせ、悲鳴を上げ、恐怖した。

怖がる益口をモニターで見て、
「そうだ、もっと、もっと怖がれ」
と菅原は憎々しげに目を怒らせた。
４つの画面に角度を変えてタクシーと車内の益口が映っている。
恐怖でパニックに陥っている益口を見て菅原は残忍に笑った。
本物、にしか見えないだろう？
この３ヶ月、ありとあらゆるテクニックを使って試行錯誤を重ね、ついに完成させた最高の清水二郎の生首のレプリカだ。骨、筋肉、血管、本物の人間と同じ構造を正確に再現し、肌は医療用の最高級人工皮膚だ、それに清水二郎の肌を細大漏らさずペイントした。あんたを見つめた目玉は、いわば本物だ、機械のカメラだがな。
見分けが付くわけがない、偽物か、本物か。何せ俺はあんたのせいで、見たくもない本物を見せられてしまったんだからな！
その恐怖を、悔しさを、たっぷり味わうがいい！

「刑事さん」
と呼びかけたのはその清水二郎その人だ。清水は義憤も露わに、タクシー運転手に扮した衣川刑事に詰め寄った。
「ひどいじゃないですか？テレビの『どっきりカメラだ』なんて騙して！？　これは、いったいなんなんです！？　これじゃあ、拷問じゃないですか！？　いったい益口を何故こんな目に遭わせるんです？！」
「黙っててくれませんか」
モニターを見ながら後ろも向かず、菅原は冷たい声で言った。
「何故？、ですか？　いいですよ、じきに、この悪魔の正体を暴いてやりますよ。あなたも！、まあ、見ていてくださいよ」
「悪魔の正体って……」
清水は眉を険しくして、この異常な状況に青くなりながら、不安そうにモニターを見た。
益口寿夫がヒーヒー悲鳴を上げて、ドスンドスン、車を揺らして怖がっている。

カンカララーン……、と、金属パイプの転がる派手な音がして、益口はまた「ヒイッ」と身をすくませて奥の暗がりを見た。
のっしのっしと、機械の間を大きな影が歩いてきた。
固まってその影をじっと見ていた益口は、やがて差し込む月光に晒された姿を見て、口をあんぐり開け、目を見開いた。

モンスターだった。
あの、額と鼻が盛り上がった筋肉の化け物、リアルに半端な変身をしたウルフマン・スリーだった。

モンスターは筋骨隆々と盛り上がった肉体にはち切れんほど伸び

たTシャツを着て、手に、何か生々しい物を持っていた。
それを見て益口はまた恐怖に引きつった。
「うわおおおおおおおっ！！！」
モンスターは吠えて、その手に握っている物を振り上げて車を殴りつけた。
「うわあああっ」
「うおおおっ、うおおおおおっ！！！」
モンスターはそれでボコンボコンとルーフを、ボンネットを、ドアを、力一杯殴りつけた。清水の生首が吹っ飛び、車はグラングランと揺れ、ドバッ、ビチャッ、とまっ赤にペイントされた。
モンスターの振り回している物、それは、股の付け根から引っこ抜かれた、血の滴る、人間の脚だった。
裸の脚に、靴下とスニーカーを履いている。細いすね毛もいっぱいに生えていた。
ドガンドガンと生脚で叩きつけられ、「ひいいっ」と益口はなす術もなく頭を抱えて椅子の下に窮屈に縮こまった。

『益口。……いや、マスター・パピー』
どこからかスピーカーから声が呼びかけた。
ドカンッ、ともう一度激しく殴りつけられ、それを最後に、モンスターは脚を放り捨て、よたよたと後退すると、
「うううう〜〜……」
と、苦しそうに頭を抱えた。
そうっと見ている益口に、
『おい、マスター』

再度スピーカーが呼びかけた。

マイクに向かってしゃべっているのは菅原だった。

23　催眠対決

高い壁に設置されたスピーカーから割れた声が呼びかける。
『マスター・パピー。俺はあんたに仲間を殺された菅原ってもんだ。その化け物マスクを作った張本人だから知ってるだろう？』
「菅原さん？」
車の中できょろきょろしながら益口は怪訝そうに聞き返した。
「知らないですよ。わたしがあなたの仲間を殺しただって？　いったい何を血迷ったことを言っているのかね？　わたしがいつ？あんたの仲間を、人を、殺した？」
『へっくっくっくっくっ・・』
スピーカーの菅原は陰気に笑った。
『もちろんあんたは自分の手は汚してないさ。あんたは、催眠術で人を操って、俺の仲間の井上や松浦たちを操って人を殺させたんだ』
「馬鹿を言うのはよしなさい！」
益口はこと自分の専門分野の話に怒って声を高くした。
「催眠術で人を殺させるようなことは出来ない！　そんなことは、専門家なら常識だ！！」
菅原は、また暗く笑った。
『くっくっくっ・・・、そうかよ？』
「そうだよ！　さあ、早くこんな馬鹿げた芝居はやめて、わたしを解放したまえ！　これ以上続けたら、警察に訴えてやるぞっ！！」
『そう。ま、ご自由に。俺はやめる気はない。と言うか、やめられないんだ』
「なっ・・・、なんでだねえ～？」
『アクシデントが起こっちまってね。まさか俺だって、あんたをはめるために本当に人を殺すつもりなんてなかったよ』
「な・・・・・・、なんだとおおーーーー・・・・・・」
『あんたのせいだよ。あんたが、そういう風に命令してたんだろう

？』
「ばっ、……馬鹿を言うんじゃない。わたしが、何をしたと言うんだねえっ？！」
『さあな？　本当だよ。あんたがどうしたか分からないで、俺たちは困っちまったんだ。なあ？　あんたが、なんとかしてくれよ？』
「わ、わたしが、し、知るかっ！？」
『そうか？　じゃあ…、どうなっても知らないぜ？　あんたも、ふふふふっ…、お友だちのジミーみたいにバラバラにされてみろよ？』
「お、おまえええーー……、本当にジミーをおおおーーー……」
『悪かったな。だからさ、事故だったんだよ。こっちはもしかしたらあんたじゃなくジミーが真犯人かも知れないって心配もあってな、ここに連れてきていたんだ。そうしたら、変身した彼が、出番前にバラバラにぶっ千切っちまった。いやあ、ほんと、悪かったなあ』
「いったい何を言っているのか、さっぱり分からんよ」
『しらばっくれるなよ？　そいつが誰か、分かるだろう？』
益口は怯えた目でよろよろよたよた頭を抱えて苦しんでいるモンスターを見た。
『リッキー。刀脇力丸君だよ。哀れな、あんたの犠牲者だよ。
前に一度催眠療法を試したんだ。そうしたら、あんたの名前が出た途端におかしくなって暴れ出した。専門家の意見では、リッキーはそれ以前に何者かに強い催眠術に掛けられて、どうやったかはさっぱりだが、深層心理の根っこまで、強力な暗示に掛けられているってことだった。
だからさ、
あんたをここに連れ込んで、あんたが寝てる間に、リッキーにもう一度催眠術を掛けてみたんだ。
そうしたら、あんたのお友だちのジミー氏をバラバラに分解しちまったってわけだ。
なあ、教えてくれよ？　どおやったんだあ？

偉い大学の先生もさっぱり、お手上げなんだよ。
あんたさあ～、悪いんだけど、
自分でなんとかしてくれよ？
今、ドアのロックを外すからさ』

「や、やめっ、」
と益口は慌てたが、４つのドアの内部でガタンと音が鳴り、益口は慌ててロックのスイッチを動かしたが、それは最初からまるで手応えがない。
『リッキー』
と呼びかける声に益口はあわあわと慌てた。

『リッキー。悪かったね、君をこんな目に遭わせてしまって。やってしまってからで悪いが、俺は君を助けることは出来ない。君をそんな風に改造した張本人が、その男、マスター・パピーこと益口寿夫なんだ。君を元どおりにする方法を知っているのはその男だけだ。その男に、元に戻してもらってくれよ』
「：マスター：パピー：：：：：：：：：」
頭を抱え込んでいたモンスターが車中の益口を見た。益口は「ヒイッ」と悲鳴を上げ、反対のドアから飛び出した。
『益口』
呼びかける声に益口は反射的に上を見た。
『あんたは俺の大事な仲間を殺した。俺はすべてを奪われた。俺は、おまえが許せない。あの世で仲間に詫びろ』
ブツッ、と大きな音をさせてスピーカーのスイッチが切られた。
「おい：：、おいっ！：：、おおいいいっ！！：：：：：：」
益口は目をぎょろぎょろさせて、ハッと、後ろを振り向いた。
ダンッ、と車に手をついて、モンスターがよろめきながらこちらに回ってきた。
「：：：：：：：：：：：：：」

「マスタあああ〜……パああピいいい〜〜……」
「！！？？……」
「俺に……何を……したああ……？……
俺に、人を、殺させたのか？
俺に、この手で、」
わなわな震えさせた手をぎゅうっと握りしめ、
「うおおおおおおおおおおっっっ！！！！」
野獣の咆哮を上げ、歯を剥き出して血走った目で益口を睨み付けた。
益口は声にビクッと首をすくめ、真っ青な顔で逃げ道を探って後ずさった。
モンスターは走ってその先へ回り、
「うおおおっ」
作業台の上の重い鉄の台を持ち上げ、旋盤機に叩きつけ、殴りつけ、耳の痛くなる派手な音と火花を立てた。思い切り投げ捨て、遠くでまたガッシャーン、と派手な音が上がった。
モンスターは興奮した荒い息をつき、
「俺を……元に戻せえー……」
恐ろしく身をすくませている益口を睨んだ。

刀脇力丸は、モンスターの特殊メイクを施され、モンスターを演じているだけだ。
催眠術は掛けられていない。
暗い中で菅原と衣川刑事はじっとモニターを見つめていた。
悪魔の催眠術を操るマスター・パピーに対して、これが3人の仕掛けた「催眠術」だった。
リラックスの反対、極度の緊張…＝恐怖を強い、冷静な思考を奪う。
死の恐怖に怯えさせ、助かるために、

秘密を暴露するのを、
じっと見守っている。
まともな逮捕なんて考えていない。
私的制裁をどう加えるかは、
益口の暴露する秘密次第だ。

24　自供

「俺を、戻せえっ！！」
刀脇はモンスターの手で上のボタンが2つはまらない益口のワイシャツの胸を掴み上げた。
喉のたっぷりした肉がぎゅっと締め上げられて、益口は『うっ』と鯉のように口を開けた。
「俺を‥‥、元に‥‥‥‥」
刀脇はぎりぎり睨んで、ぐぐぐっと益口の喉を絞り上げた。
じっとモンスターの目を見た益口は、
「おい、本当に俺を殺す気か？
おまえが、俺を、殺せるのか？」
と訊いた。
どこまでやったらいい？これ以上やったら本当に絞め殺しかねないぞ？と迷いの生まれていた刀脇は、ハッと、一瞬手をゆるめた。
益口は、ニヤッと笑った。
「よせよ。お芝居なんだろう？　おまえに人なんか殺せない。なあ？そうだろう？　リッキー君」
益口は余裕のある優しい声で言い、ポンポン、とモンスターの腕を叩いた。
「ひどいトラウマを抱えてしまっただろうに、君はよくやったよ。いやほんと、大した役者根性だ。だが、間違っているよ。菅原君と言ったか？、君もだ。どうせカメラで見ているんだろう？　君らの、負けだ」

モニターを睨んでいた菅原と衣川はぎゅうっと眉間にしわを寄せて、無言だった。

益口は得意になって言った。

「ジミーの生首もよくできていたよ。いや、見事な物だった。わたしもすっかり騙されてしまったよ。だが、本物の、」

と刀脇の目を見て、

「瞳の表情は、機械では再現できないよ。瞳の表情で、その人間がどこまで本気か、読めるのだよ」

と、刀脇の瞳を飲み込むように大きく目を開いた。

「放せよ。君、今度は起訴されるよ？」

益口は、ぐっと、陰険な顔になった。

「放せと言ってるんだ。聞こえんのか？」

刀脇は、

「うおおおおっっっっ！」

「うえっ、」

益口の胸ぐらを力任せに投げ飛ばした。

ドタドタ足のついていかない益口はゴロンと転がり、木箱の角に背中を打って

「ぎゃっ」

と悲鳴を上げた。

「うおおっ」

刀脇は益口の太った腹を蹴り上げた。

「うげええっ」

益口はうめいた。

「うおおっ」

吠えた刀脇は両手で胸ぐらを掴んで益口を立ち上がらせると、思

い切り頬をぶん殴った。
「・・・・」
益口は声もなくぶっ倒れた。
刀脇は、転がる背に蹴りを入れた。モニターを見る菅原衣川にもそれはとても芝居に見えなかった。
刀脇は、鼻血をたらしてぐったりする益口をぎりぎり締め上げ、ドスッと腹に拳を叩き込んだ。
ゲホッと益口は血を吐いた。
「おまえだ」
言う刀脇を、益口は閉じそうな目で見た。
「おまえが犯人なんだろう？　言えよ？　自白しろよ？　でないと、本当にぶっ殺すぞ！？」

「やめさせろ！　本当に殺してしまうぞ！」
と、清水は騒いだ。

益口は刀脇の目に狂った「本気」を見て、上げた手で力なく「分かった分かった」とやった。
「は、放してくれ・・・、苦しいよ・・・・・・」
刀脇は睨んで、放した。
益口は後ろに座り込もうとして、ドン、とちょうど車のドアに寄りかかった。
鼻と口から血を噴いて、恨めしそうに睨みながら、益口は言った。
「ここまでやって、ただで済むとは思っちゃいまいな？　ハ・・・ハハハ・ハ・・・・・。
分かった。おまえら、
どうなっても、
いいんだな？」
じっと怒りに染まった目で睨み付ける刀脇を、益口も凶悪な目で睨み返した。

「リッキー坊や」
刀脇が一瞬でひるんだ。
益口は凶悪な目のまま、凶悪に笑った。
「ひ弱で、嘘つきな、リッキー坊やちゃん」
刀脇は狼狽し、首をガクガクさせた。
「かっこよくてタフガイのアクションスター。兄貴と呼ばれ慕われる頼りがいある男の中の男。フンッ、お笑いぐさだと、自分で思うだろう、ええ？、リッキーくん？」
刀脇は後ずさり、怯えた。
益口はよいしょと立ち上がり、まっすぐ、刀脇を陰湿な目で見つめた。
「おまえの出世作、『灼熱、ホワイトバーン』だったっけか？　スタント無しの本物のリングファイト？　そういう売りだったよなあ？　それは、ほんとおかなあ～～？」
刀脇は立ち尽くし、頭を抱えて、しゃがみ込んだ。
見下ろし、益口は続ける。
「プロのボクサーのパンチを浴びて、膨れ上がったひどい顔をしていたよなあ？　どうだ？痛かったか？　痛くねえよな？　作り物のこぶだもんなあ？　おまえはプロのパンチなんか一発も受けちゃいない、そうだろう？　…菅原…、そうか、あんただったなあ？あの映画でリッキーの殴られた顔を作ったのは？　へっへっへっへっへっ、殴られて腫れた後の試合は、全部スタントマンの吹き替えなんだよな？　殴られて腫れまくったスタントマンの顔そっくりになるように、リッキーの顔を作ったんだよな？　あのひどく殴られた名前も無いスタントマンはどうしてる？　生きてるかあ？　ハッハッハッハッハッ、頼れるタフガイの兄貴の、とんだ出世作だったよなあ？　ええ？　リッキ～、菅原。そうだろう？」
刀脇は頭を抱えて丸く縮こまり、菅原も血の気を失った顔を強張らせていた。
「違う…、そうじゃない…」

と、菅原は口の中でつぶやいていた。
「おおーーいっ！」
今やすっかり形勢逆転した益口が大声を上げた。
「いつまでも隠れてないでいいかげん出てこいよっ！
なんなら、こいつをもっと苛めて、廃人にしてやろうかっ！？」
菅原は、ガタン、と立ち上がった。

ギイッとドアが開いて、菅原と、衣川刑事と、清水二郎が現れた。
「初めまして。刑事さん、衣川さんだったね？　やっぱりあんたも噛んでたのか。ジミー。無事だったか。本当にひどい目に遭わされたりしてないだろうね？」
「マスター」
清水はひどく心配した顔で呼びかけた。
「悪かったな。僕も騙されたんだよ。さ、警察に行こう。こんな暴力を振るわれて、こいつら許せないよ。訴えて、しっかり罪を償わせよう」
ケガをした益口に歩み寄ろうとして、清水は衣川刑事に腕を掴まれた。清水は怒った顔で睨んだ。
「なんです？　あんた、まだ言い逃れするつもりか？　あんたら、完全に頭おかしいよ」
清水の腕を掴んで、衣川は敵意を隠そうともせずに益口を睨んだ。
「益口寿夫。正直に言うよ。我々の完敗だ。あんたのパーフェクト勝利だ。負けを認めるから、教えてくれないか？　いったい、どうやったんだ？」
益口は嘲った。
「フン、そんな安い手に引っかかるか。どうせカメラで録画してるんだろう？　わたしの不利になるようなことをしゃべるかよ」
「気にする必要もないだろう？　あんたを監禁して、暴力を振るっ

て、無理矢理言わせていることだ、俺たちの犯罪の立証にはなっても、あんたの罪を問う証拠には一切使えないよ。抜け目無いあんたなら分かるだろう？こうして違法に採取した証拠は、それが真実であっても、証拠採用されないんだよ。つまりこの状況下でしゃべったことは、一切、裁判には持ち込めないんだよ？　ここであんたにそれを自供されちまうのは、警察としちゃあ最悪に拙いんだよ。どうだ？これだけお膳立てしてやったんだ、あんたの勝ちは決まったから、教えてくれよ？

マスター・パピー。

どうやって、

人を殺させた？」

益口はちらっと清水を気にしたが、ため息をつき、やれやれと頭を振った。

「いいだろう。教えてやるよ。

そうだ、全部、

俺がやらせたことだ。

俺が、やつらに、人殺しをさせたんだよ」

25　犯行の経緯

清水は、呆然と悲愴な顔をし、益口はすまなそうに見つめて首を振った。
「そうなんだよ、わたしなんだよ」
「マスター・・・・。どうして？・・・・」
「どうして？　フム。」
益口は小さくなって震えている刀脇を見下して言った。
「腹が立ったからだよ、こいつに、オモチャにされて」
衣川が訊いた。
「それは、テレビ番組に出演したときのことか？」
「ああ、そうだよ。馬鹿にして笑われたから、仕返ししてやろうと思ったのさ。こっぴどくな」
「では何故だ？　刀脇に仕返しを済ませて、何故犯行を続けた？」
「清水・・」
益口は哀れっぽく清水二郎を見つめた。
「おまえのためだよ」
「ぼ、僕の？・・・・」
清水は悲痛に顔を歪めた。
「どういうことだい？　どうして僕が・・」
「いや。おまえじゃないや、おまえの奥さん、五月さんのためだよ」
「サツキの？」
「そう。五月さんは、おまえには過ぎたいい女房だよ。まったく、羨ましい。俺が心密かに恋心を抱いているのを、知っているだろう？　また、倒れたんだろう？　俺が出してやった入院費用、おまえ、受け取っただろう？」
「！・・・・・。あの金を・・・仕事のギャラじゃなかったのか？」
「おまえ俺のマネージャーだろう？　馬鹿か。俺にそんな貯金あるかよ。奪ったんだよ、金貸しのいけ好かねえ婆あをぶっ殺してな」

「なっ、なんだってえ？・・・・」
清水は貧血を起こして倒れそうになった。衣川が支えてしゃがませてやって、訊く。
「あの蛇みたいな男を使ったんだな？　あれは、誰だ？」
「慌てるな。犯人が捕まってない事件は後回しだ。
分かりやすい中学生の坊やの事件から教えてやろう。
あの坊やは実に簡単だ。毎日毎日苛められて、いっそ死んでしまいたいって思い悩んでいたから、簡単に、『催眠状態』に導けたよ」
「だからどうして、彼に人殺しをさせる必要がある？」
「必要は、特にない。木を隠すなら森って言うだろう？　わたしが必要だったのは五月さんの治療の金だ。後は金を奪う事件のカモフラージュさ」
「それだけ多く証拠を残すことになって危険だろう？」
「そうだねえ。ま、面白かったから、かな？　世間もテレビでネットで大騒ぎして、ずいぶん楽しんでいたじゃないか？」
「・・・・・どうやって・・・・」
「慌てるな。マンションの事件も教えてやるよ。
あの男のそもそもの動機は、痴漢事件のえん罪か？　気の毒になあ・・・・・・・・。
実は、
その痴漢行為をしたのは、わたしなんだよ」
「なにいっ！？」
さすがにその悪趣味さに衣川は声を荒げた。益口はへらへら笑って続けた。
「そうだったんだよ。いい女だなあと思って、つい手が出てしまった。たまたま近くにいた彼が疑われてしまってねえー・、いや、悪いことをした」
「・・・おまえ、わざと彼に罪を着せたんだろう？」
「その通り。面白かったよ」
ひっひっひ、と益口は悪趣味に笑った。

「あの男も女に対する恨みをたっぷり持っていたからね、簡単だったよ、『催眠状態』にするのは」
「……」
「ご静聴ありがとう。菅原。あんたのお仲間の、井上と松浦?、彼らも同様。ついでにあんたも始末して、自分たちはお巡りに撃ち殺されればさっぱりしたんだがね、まあ、あんなものだろう。
さて、ではその蛇男の素性だが……、これは最後のお楽しみだ」
うっふっふ、と笑う益口を睨んで衣川が言った。
「じゃあ教えてくれよ、どうやって、出来るはずのない『殺人命令』を催眠術でやった?」
「そう…。フム、たとえ殺人願望があっても社会的な常識が邪魔をして、けっして本人がそれを行うことはしない。まあ、催眠術の常識ではその通りだ。
わたしは、
その邪魔な社会常識の通じない存在に、彼らを導いてやったのだよ。
ゲームと、モンスターのマスクを使って、彼らを本物のモンスターに変身させてやったんだよ」
「そうだろうとは思っていたが、出来るか?そんなマンガみたいなことが?」
「出来るか?、か……。ふうーーーーーーー……。
わたしは自分でも自分を催眠術の天才と自負しておる。
だが悲しいことに、わたしの催眠術も万能ではない。一つ、どうしても出来ないことがある」
「それは、なんだ?」
「女にわたしを好きにさせることだよ!」
益口は大げさに手を広げ、いかにも悲劇だ!と言わんばかりの表情をした。
「女たちは、この天才のわたしが、いくら催眠術を掛けても、決してわたしを好きになろうとはしない!　ああ、まったく、何故なん

だろうねええ～？・・・・」
「それが、おまえの歪んだ心の正体か？　当たり前だ、人の心を操ろうとする者を、好きになる人間がいるものか！」
「フンッ、どうやらそのようだねえ」
と益口は面白くなさそうに認めた。衣川はイライラした心を抑えて言った。
「それで、どうやったんだ？」
益口はニカッとマスター・パピーの笑いを浮かべた。
「そっちは簡単だよ。絶対的な常識を、絶対的にぶち壊して見せればいいんだよ！」
「絶対的な常識っていうのは、なんだ？！」
「この世の常識を破壊して、自分もそうなれるんだと思わせてやればいいんだよ！」
「だからっ、それはなんなんだ！！？？」
「待たせたね、教えてやるよ、蛇男の正体を」

益口は血に汚れた鼻と口を袖で拭い、まっすぐ向いて、ふうっと表情をなくすと、
ゴキッ、ゴキッ、ゴキッ、と肩を動かして震えた。
ゴキゴキッと下顎を前につきだして首を伸ばし、すると、丸く膨らんでいたカエルの肉が、二つに割れ、太い筋になった。
「ま・・・・、まさか・・・・・・・・」
3人はその光景に我が目を疑った。
こんなことが起こるわけない！　常識的に、あり得ない！
ゴキッゴキッゴキッゴキッゴキッ。
「ふうーーーーー・・・・」
息を吐いて、益口？はニヤッと笑った。

「驚いたか？　これが俺の『ウルフマン・ゼロ』だ」

呆然と見つめる3人の目の前に立つのは、髪の毛こそ真っ白だが、紛れもなくあの手配画像の男だった。

益口寿夫こそ、手配されても一向に捕まる気配のないオールバック３０代の苦み走ったキングコブラ男、その者だった。

３人の目撃者は、戦慄した。

26　究極催眠

「バ、……馬鹿な……、いったいどういうトリックだ？」

現れた男は、シュッと細面で、贅肉が無く、首と腹にたっぷり纏っていたたぷたぷの脂肪も、すっかり消えて、代わりに肩幅の広いがっしりした体格に変わっている。

まったく、益口とは似ても似つかぬスポーツマンタイプの男だ。

ただ、言われてみれば目だけが、益口のくっきり二重をぐっと吊り上げた感じか。

「トリックだと？」

益口…のはずの男は薄い唇を歪めてあざ笑った。

「トリックなんかねえよ。見たまんまさ。おまえら、自分の目も信じられねえのか？」

「ひ、人が…」

菅原が引きつった声で言った。

「人が…、変身…なんか、するわけない……」

「ああ、変身なんかされたらあんたの商売上がったりだな？」

益口はあざ笑った。

「俺は元々こういう顔をしている…んだろうぜ？　おまえらの安い特殊メイクと違って俺は別に普段脂肪スーツを着ているわけじゃねえ。状態が、違うだけでな。どっちも本当の俺なんだよ」

「あり…得ない……」

尚も信じられない菅原を益口は馬鹿にして笑った。

「人間ってえのは毎日鏡を見て、多かれ少なかれ自分で顔を『矯正』しているものなんだよ。俺は、自己催眠を掛けることによってそれ

を極端にできるのさ」
「自己催眠だと？」
衣川もまだ疑いながら油断無く益口を睨みながら訊いた。
「それで脂肪を自在に操れるって言うのか？　おまえ、もしかして、今俺たちに催眠術を掛けてないか？」
菅原もハッとそうに違いないと思った。
だが益口はあざ笑って言った。
「だから、そんな安いトリックはねえよ。俺の天才的な催眠術は自分の肉体もそう『思い込ませる』ことが出来るのさ。
信じられねえなら、もっと見せてやろうか？　これが、
そいつらに見せてやった、」
と震える刀脇を見て、
「現実崩壊だ！」

またスッと表情が消えて、
くわっと目を見開くと、
「うおおおおおお」
顔をまっ赤にさせて力んだ。
にょろっと額に図太い血管が走り、
仁王のような怒りの表情が、ボコン、と肉となって盛り上がり、固定された。
バリッ、バリバリバリッ、とワイシャツが裂け、ボタンが吹っ飛び、背広の肩が丸く盛り上がってブツブツ糸が切れて、バリッと、裂けた。
「うおおおーーー、おおっ」
両手両足を踏ん張った益口は、変身を終え、ニヤリと見物人たちを見た。
「……」
もはや言葉もない。清水は白目を剥いてふらふらして、とうとう気を失い、菅原と衣川は悪夢の光景に目を見開き、必死に自分の現

実を見失わないように心で格闘した。

益口の第2段変身。

現れたのは、刀脇と同じ「ウルフマン・スリー」のモンスターだった。

菅原はつぶやいた。

「マスクじゃ・・・なかったんだ・・・・・・・」

キャバクラに入店した益口は、その前にマスクで変装して三角ビルの金貸しを襲ったわけではなく、恐らく、キャバクラ店内でもこうして変身して、店内の女の子たちを襲い、皆殺しにしたのだろう。

本物の凶暴なモンスターの面相に菅原は思わずブルッと震えた。

益口のモンスターはその様子に満足そうに笑った。

「今度は信じてもらえたようだね？

そういうことなのだよ。

ゲームを渡した連中にはこうして変身して見せ、彼らを閉じ込めている『現実の檻』をぶち壊し、彼らにも、わたしのように『変身』出来る、と催眠術を掛けてやったのさ。ただ、彼らのレベルではわたしのような本物の変身は出来ないのでね、代わりに変身セットをおまけに付けてやったという訳さ。

『スーパーウルフマン』のゲームをやりながら、徐々に自分も変身していくように思い込ませ、クリアすることによって、変身が完成する、という風にね。ハハハ、モンスターのマスクを被ってモンスターになった気分で大暴れするなんて、子供時代のスーパーヒーローごっこを思い出さないか？　ハハハハハ」

衣川が訊いた。

「そのゲームは、ＳＵＮＢＲＡＩＮの磯坪に改造させたんだろう？」

「ああ、そうだよ。あいつも簡単だったなあ」

「コンビニで多田の替え玉になったのは誰だ？」

「さあ？　わたしも名前なんて知らないよ。使えそうだと思った若

い奴をホームレスに仕立てて差し向けただけだからな」
「そいつまで催眠術で操っていたのか？　おまえを尾行していた刑事を刺した男は？」
「さあね？　そいつも人を刺したそうな顔をしていたから、『あいつはデカだからぶっ殺しちゃえよ』ってけしかけただけでね」
「ちくしょう、やりたい放題だな・・・」
「わたしは、」
益口は威張った。
「万能だ！」
情けなさそうに、
「女性以外にはね」

「さて」
益口は、顔を覆った手の間から自分を覗き見ている刀脇を見て言った。
「手品の種を知ってしまったお客には、やはり消えてもらわなくてはならないな。おい、リッキー。秘密を公表されたくなかったら、証人をみんな消してしまえよ？」
うん？と睨まれて、刀脇は震えながら、血走った目を菅原と衣川に向けた。
菅原は、そうだ、と思いだし、言った。
「リッキー！　君は嘘つきの卑怯者なんかじゃない！　君は、立派な俳優だ！　俺たちは裏方で映画って言う世界を作る。リッキー、俳優の君も同じだろう？　映画会社の宣伝に問題はあったかも知れないが、映画の中の君は、本物だ！　現実の俺たちは裏でいいんだよ、だが、あんたの演じた主人公は、映画の中では、映画を見る人間の心には、本物なんだよ！　恥じる必要なんてない、俺は、あの映画を誇りに思っている！　あんたといっしょに作ったあの映画を、誇りに思ってるんだよ！　あんたも、誇りを持てよ！？　こんな化け物野郎に、その誇りを踏みにじらせて、負けるんじゃねえよっ！

！」
「うっうっ、ううっ……」
くわっと怒りを燃え立たせた刀脇は、
「うおおおおおっ！！」
猛然とモンスターに襲いかかった。
「くそっ、」
２匹のよく似たモンスターは取っ組み合い、……果たして、変身した益口は姿の通りに強いのか？
刀脇のモンスターは益口のモンスターの首を両手で掴んで絞めた。外からその腕を掴んでいた益口は、スッと下から腕を潜り込ませると、両手を上に掲げ、刀脇の首の両脇に激烈なチョップを叩き込んだ。刀脇は「ぐわっ」と顔を歪め、堪らず手を放すと、
「フン、」
益口は左手で刀脇の頭を掴み、強烈なパンチを顔面に叩き込んだ。クワンと首を後ろに弾かれ、刀脇はひっくり返った。
「そういやさっきはこういうことをしてくれたな？」
益口はドスン！と倒れた刀脇の腹に足を蹴り下ろした。
「うげえっ、」
刀脇は苦しそうにうめいて体を跳ね上げた。益口はぐりぐりと踏みにじった。
「おい、タチワキ。きさま、この俺に本気でたてつく気か？」
睨まれて、怯えながらも刀脇は怒りの目で睨み返した。
「そうかよ？」
益口は冷たい目で言い……
「益口いっ！いい加減にしろ！！」
衣川刑事が拳銃を構えて益口の頭に狙いを定めた。
「おまえが本物の悪魔だってことは分かった。おまえが刀脇や俺たちを殺そうというなら、先にこっちが撃ち殺すまでだ！！」
益口はジロッと衣川を睨んだ。

「あんた捜査は謹慎中だろ？　拳銃を持ち歩いているとは信じられないね？」
「どうかな？　一発勝負だ、試してみるか？」
衣川は、ジリ、と、引き金に掛ける指に力を入れた。

27LAST　ウルティメート

「そうか。そっちも命がけってことか？
俺が本物の悪魔だと分かった、だと？
ふっふっふ、
分かっちゃいないよ、まだ、本物の悪魔がどういうものか」
「なにい？」
拳銃を構えながら、衣川は額に脂汗をたらした。
「どういう・・・ことだ？」
「見せてやるよ、もう決して現実には帰れない、究極の悪夢を、な」

益口は再びグッと全身を力ませ踏ん張った。
踏みつけられた刀脇は「げええっ、」とうめき、拳銃を構える衣川は「益口いっ！」と叫んだが、引き金は引けなかった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ」

バリバリバリッと、服もズボンもはち切らせ、益口の体はゴツゴツと膨れていった。
衣川も菅原も眼前に繰り広げられているものがまるで信じられなかった。まさに悪夢だ。
これが現実になってしまったら・・・
ふつうの世界に戻ってくる自信がない・・・・。
叫ぶ益口の変身は続く。
胸と肩と腕がずんぐり脹らみ、黒い剛毛が覆い、
顔は鼻と耳が大きく尖り、もはや完全に人間ではなくなっている。
「ウルフマン・フィフティーン＝スーパーウルフマン！」

うおおおおおお、と、益口の体は更に大きくなった。
ビチビチと張った筋肉が音を立てて更に膨れ上がり、腕がニュウッと伸び、肩幅もグングングンと広がり、うおおと吠えて力む背中がバリバリと膨れ、体を起こすたびバキバキッと骨が鳴って背が伸びた。
黒かった体毛が白銀に変わっていった。狼の顔を覆う毛も、白く輝き、背になびいている。

菅原は、もはや完全に飲まれて、ただただ見せつけられていた。
人が、意志の力でここまで変わるのか？……
いや、そんなことはあり得ない、こいつは、
最初からこういう化け物なんだ！
本物の、モンスターなんだ！！

うおおっ、と吠え、
身長３メートルを優に超えた巨大な人型の狼は、
金色の目で人間たちをねめ回した。

「これが、究極、ウルティメート・ウルフマンだ」

パンッ。
衣川は構えた銃を撃った。
１００パーセント完全なモンスターの益口は見下ろしながら、ピクリとも動かなかった。
ニヤリと人間的な笑いを浮かべ、
「やはりはったりか。オモチャの銃じゃ狼は殺せないぞ？」
やたら低音の響く声で言った。
衣川は言った。

「ああ、そうだろうぜ」

ガタン、と空で大きな音が鳴った。

なんだ、と見上げる益口の目に、カッと、白い強力な光が射し込んだ。

「な？　なんだ？」

工場の屋根が、空に吊り上げられ、開いた隙間から大量の大型ライトが光を投射していた。

「・・・・・・・・・・・・」

益口は事態を計って忌々しげに目を細めた。

「益口。いや、マスター・パピー」

菅原がじっと暗い目で見上げて言った。

「あんたを法律で裁けないのは最初から分かっていた。・・・まさかコブラ男があんた本人だとはさすがに思いも寄らなかったんでね。法律じゃ裁けないから、せめてあんたの存在をこの世から抹殺しようと思ったんだ。

隠しカメラの映像は、ライブで、全世界にネット配信されているよ。ま、それを見てこれが本当に起きている現実のことだなんて、誰も思っちゃいないだろうがな。

だからな、マスター、考えろ。

俺たちを殺して、死体にしちまったら、

本物の死体が出てきちまったら、

あれは冗談でしたー、ただの映画でしたー、じゃ、済まなくなるぜ？」

モンスターと化したマスター・パピーは、いかにも今すぐ引き裂いてやりたげに、憎々しく菅原を睨んだ。

「マスター。ここがどこか分かるか？　俺の・・、俺たちのスタジオスカーレッドがあった撮影所のセットの中だ。制作が大幅に延期に

なった『幻魔黙示録』のスタッフに協力してもらってな、廃工場のセットを組んでもらったのさ。彼らも、大いにあんたに恨みを持っているんでね」
マスター・パピーは、どこにいるのかいないのか、そのスタッフたちを捜して眩しい光の中視線を動かした。
衣川が言った。
「みんな周りでスタンバってるよ。全員目撃者だ。一応特撮映画の撮影って名目でな。俺の、オモチャの、銃の発砲を合図に、屋根を取っ払って、仕掛けを明かす段取りだったんだ」
睨み付けて、
「おまえはまんまと引っかかったんだよ、ええ？　天才催眠術師のマスター・パピーさんよお？　この世界にもう、おまえさんの居場所はないぜ？」
白銀のモンスターは、大人の指ほどもある牙の並ぶ口をわななかせて、ざっ、ざっ、と、辺りを威嚇するように動いた。
「いくらおまえでもここにいる全員を逃げ出す前に殺すのは無理だぜ？　撮影所の外には俺の相棒の乗ったパトカーが控えている。外に出て暴れりゃ、喜んで、本物の拳銃で撃ち殺すぜ？　それとも、なんだ、おまえのその化け物の体は、ゲームのようにピストルの弾も跳ね返すのかい？　ええ？どうなんだい？」
モンスターは口からよだれを垂らし、まっ赤に充血した目で衣川刑事を睨んだ。
勝利を確信している衣川刑事は、ふと、訊いた。
「おまえ、それを究極と言ったな？　自己催眠で自分の体を改造したんだよな？　だが、そこまでやる必要があったのか？　おまえ、これまでその姿になったことはあるのか？　調子に乗って、自分に深く催眠を掛けすぎたんじゃないか？　おまえのその姿は、どう見ても人間じゃねえぞ？　おまえ、もしかして、そのまま人間に戻れない、とか言うんじゃねえか？」
モンスターは口を閉じ、まっすぐ顔を向けると、言った。

「さあ？　どうだろうな？」
マスター・パピーは攻撃の姿勢を解いて、のっしのっしと歩き、ドアに向かった。
菅原は暗い目で追い、呼びかけた。
「どこへ行く？化け物」
白銀の巨大な狼は半分顔を振り向かせ、言った。
「夢の続きを見に行くさ。どんな夢なのか、俺にも分からないがね」
マスターは、ギイとドアを開け、出て、バタンと閉めた。
ガラガラガラとスタジオの大きな戸を開く音がした。
静かになったセットで、菅原は思った。
悪夢は終わった。続きの悪夢は、あいつが見ればいいさ、と。
しかし、それにしても、
夢のようで、
とても現実にあったこととは思えない。
すべて催眠術で見せられた幻‥、と考えた方がまだ信じられる。
そうすると、
あの白塗り、緑の髪の毛をした、でっぷり太ったマスター・パピーの大きな笑いが目に浮かんだ。

？完？

BONUS STAGE バトルフィールド（前書き）

＊あると思いました？

BONUS　STAGE　バトルフィールド

午前5時、マンション5階の磯坪鬼仁郎の部屋から突然「うおおっ」と叫ぶ声と、派手に物を破壊する音が上がった。
表を張っていた3人の刑事たちは直ちに本部に連絡し、2人が確認すべくエントランスに向かい、インターフォンで警備員に連絡し、入れてもらった。
エレベーターと階段に分かれ、5階で合流すると、ドンドンと戸を叩いた。中では激しくうおおと叫ぶ声と物を破壊する音が続いている。
「磯坪さん、警察です。ここを開けてください。磯坪さん。磯坪！ここを開けろ！」
廊下に並ぶドアが2、3、開いて、住民が不安そうな顔を覗かせた。
「磯坪おっ！！」
ドンドン戸を叩いて、叫ぶ声に返事をする気がないのを見ると、刑事はいっしょに来た警備員に戸を開けるよう指示した。警備員は緊張しながらマスターキーで鍵を開けた。
「磯坪っ！、入るぞおっ！」
刑事が予告してドアノブをひねって引こうとすると、ドンッと激しくドアが押し開けられ、刑事は危うく手を弾かれそうになって引っ込めた。
「いそつ・・」
「がおおっ！！」
目を物凄く血走らせ、顔の中心に深くしわを寄せた野獣の顔の磯坪が飛び出し、驚く刑事の顔に手を伸ばし、爪で思いっきりガリッと引っ掻いた。刑事はぎゃっと悲鳴を上げ、もう1人が横から「この野郎！」と組み付いた。
「がおおっ」

「ううわあっ」
磯坪は凄まじい怪力で刑事を振り回し、コンクリートの壁に思い切り背中を叩きつけた。磯坪はそのまま刑事を壁に押し付け、ドスンドスンと思い切りパンチを腹に叩き込んだ。
「やめろおっ！」
顔を血だらけにした刑事が後ろから羽交い締めにしようとしたが、振り回す腕に振りほどかれ、再度掴みかかったところを顔面を肘で強打され、再び鼻血を噴いて堪らず後退してかがみ込んだ。
ドスンドスン。腹を壁に突き上げられ、つま先の浮いた刑事は口からゴボリゴボリと血を噴いて白目を剥いて、動かなかった。
「や、やめ、やめなさい・・・」
中年の警備員は震え声で警告し、けっきょく「ひい」と逃げ出した。廊下のドアはバタンバタンと閉まって、住民はひたすら息を殺して恐ろしい時間の過ぎ去るのを待った。
表でけたたましいサイレンが３つ４つ重なって迫ってきた。
「うおおおっ、うおおおおおっ！！！」
パンッ。
物凄い顔で目の血を拭いて、刑事は構えた拳銃を撃った。後ろからパジャマの太ももを。
「ぐおおーっ！！」
怒り狂って振り向いたところを、パンッ、肩を。更に怒って飛びかかってこようとしたので、パンッ、胸を。磯坪はよろけながら、刑事を睨み、
「がああああっっ」
吠え、刑事は、パンッ、眉間に銃弾を撃ち込んだ。
ドタドタと大勢の刑事警官が駆けつけてくると、そこは既に静かで、血の海となっていた。
衣川刑事の作戦はそれとなく捜査本部に通告されていた。その時刻、マスター・パピーに催眠術を掛けられている恐れのある磯坪を

厳重に見張っておくように、とも。ネットでマスター・パピーの映像を流せばそれを見てどんな反応を示すか分からない。衣川刑事としてはその危険も考えて「ライブ中継」は口先だけの嘘をつくことも考えたが、やはり世間に益口の正体を知らせる必要がある。そこで、作戦の決行を深夜と言うより早朝に行うことにして、極力磯坪が中継映像を見ないように配慮したのだが。

残念ながら結局心配したとおりのことが起こってしまった。

そして……。

朝日を眩しく見ながら、巨大な人狼の益口は撮影所の表の道路をのしりのしりと歩いていた。表は閑静な住宅街が広がっている。

新聞配達のオートバイがぽかんと口を開けているのを面白そうに眺めながら、人狼は悠然と駅に向かって歩いていた。後ろから携帯で連絡を取りながら稲村刑事がこそこそ付いてきている。狼の巨大に尖った耳は離れた人の声もよく聞き取った。

狼はニタリと笑った。

もうじき、通りに人が溢れるだろう。

そこで、さあて、どう暴れてやろう？

狼は自分の固い毛の毛皮がふつうの銃弾など軽い打撲程度の傷しか負わないのを知っている。そう、知っている。

ウルティメートウルフマンの俺に日本の警察ごときの装備で太刀打ちできるものか。

それに……。

人狼は悪魔のごとき底意地の悪い笑いを浮かべた。

言っただろう、

決して、

現実には帰れない、究極の悪夢を見せてやる、

と。

さて。

巨大な人狼はたまたま家から出てきたＯＬ風の若い女を見下ろすと、恐怖に丸く目を開く顔を、ガブリと、頭から飲み込んだ。

パンッ。

背中に銃撃を受け、究極の人狼は、まっ赤に鮮血を滴らせる口で、ニタリ、振り向いた。

東京都内と、その近隣県のあちこちで、獣の激しい咆哮と、破壊音と、人々の悲鳴が上がっていた。やがて、激しい銃撃の音も。

ウルフマン・ゼロの益口が配って歩いた「スーパーウルフマン」のＤＶＤ－ＲＯＭはまだまだ何十枚とあった。それを受け取った彼らに一々催眠術は施していないが、マスター・パピーのイントロダクションムービーを付けてある。

そして、磯坪は、こうした事態が起きた場合の指令に従い、ライブ映像を見ながら、一方でせっせとＰＣ仕様の「スーパーウルフマン」をあちこちのフリーソフトサイトにアップロードしていた。これから、世界中に、廃工場で変身する「ウルティメートウルフマン」のライブ映像共々、繰り返しコピーにコピーを重ね、無限に、永遠に、広がっていくことだろう。

人々は刺激に飢えている。

ストレスの厳しい社会に、爆発的な不満を抱えている人間などいくらでもいる。

彼らは、禁断の果実に、喜んで手を伸ばすだろう。

パンドラの箱を飛び出した災いは世界中に災厄を溢れさせ、

箱の中に、最後に残った希望は・・・

「そんなもの、ないよ」

恐怖に目を見張る稲村刑事の頭に、鋭い爪の巨大な獣の手が、振り下ろされた。

THE END

BONUS STAGE バトルフィールド（後書き）

＊もうありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5068k/

モンスターマスク

2010年10月8日14時50分発行